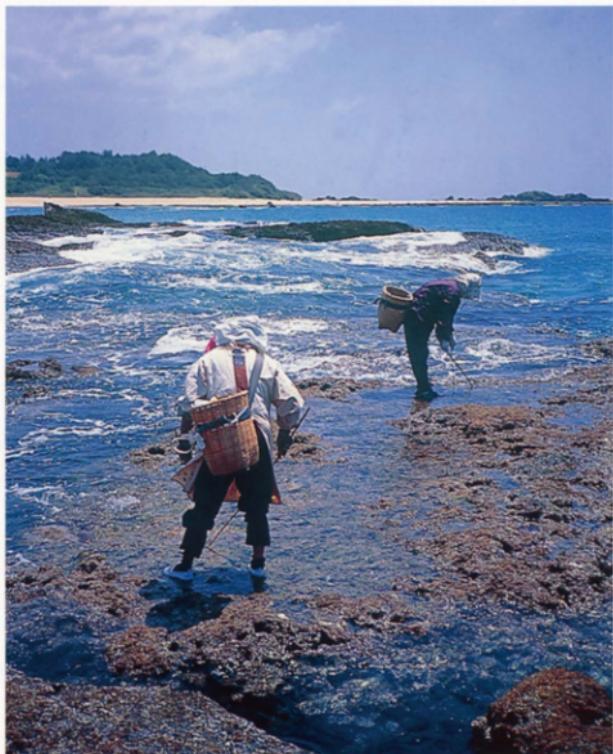


笠利町文化財報告書第27集

安良川遺跡

A R A G O U S I T E



2005年3月

鹿児島県大島郡 笠利町教育委員会

序 文

本書「安良川遺跡」は平成15年度から16年度まで、文化庁と鹿児島県文化財課のご協力をいただき発掘調査をいたしました。安良川遺跡のある用集落は笠利町東海岸の北端に位置し、前面に広がるリーフと珊瑚礁は長さ約2kmに及び島内でも美しい海岸線を形成している地区であります。珊瑚礁に囲まれた砂浜は奄美最北端の用岬から集落南側まで広がっており、6月頃から海亀も産卵のため上陸する砂浜として知られています。

このような恵まれた自然を保有する地区に大昔の人々が生活をしていた遺跡が発見されたのは昭和45年頃とされています。恵まれた自然に7世紀前後の人々が生活を始めていたことになります。遺跡からは夜光貝が小さいものから大きなものまでたくさん採集され、食用と貝製品に利用されていたようです。奄美・沖縄では7世紀前後の人々の生活がどのようなものであったかまだ不明な部分が多いとされています。当遺跡からはその時代の人々の暮らしが判かるとされる貴重な生活資料がたくさん出土しました。

安良川に住んでいた人々が使用した鉄製釣り針や貝製装飾品、豊富な土器などとともに、食用にされた魚貝類、植物、動物骨などの調査も行われました。これらの調査は熊本大学の木下尚子教授を中心に、奄美、沖縄を共同研究されている札幌大学高宮広土先生、早稲田大学樋泉岳二先生、千葉県立博物館黒住耐二先生、沖縄県埋蔵文化財センター岸本義彦先生方のご協力を頂きました。また、発掘調査は熊本大学考古学研究室木下先生を始め学生、大学院生の全面的ご協力を頂いて行われたことに感謝申し上げます。

ここで得られた成果は私たちの貴重な文化遺産であります。本書が奄美、沖縄の7世紀前後の謎の部分を解明する研究に、そして、文化財の保護と活用に役立てれば幸いに思います。

おわりに、この調査にご指導をいただきました文化庁、鹿児島県教育委員会、用集落の皆さんをはじめ多くの方々に感謝申し上げますとともに、発掘現場や遺物整理に携われた多くの先生方を始め地元の方々に対し、敬意と感謝を表します。

平成17年3月

笠利町教育委員会
教育長 山野利光

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あらごう いせき
書名	安良川遺跡
編著者名	高宮広士（植物遺体）、樋泉岳二（動物遺体）、黒住耐二（貝類遺体）、中山清美（考古学）
編集機関	笠利町教育委員会
発行年月日	2005年（平成17年）3月31日
所収遺跡名	安良川遺跡
コード	
遺跡所在地	大島郡笠利町用安良川
調査期間年月日	平成15年4月23日から平成15年5月15日
調査面積	300m ²
種別	生活址
主な時代	7c前後
主な遺構・遺物	兼久式土器等 才オツタノハ貝製品・無文貝符・貝小玉・ 円盤型有孔貝製品 釣り針、磨り石、たたき石、クガニ石 ムラサキオカヤドカリ

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査日誌主抄	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺地形	
第1節 遺跡の立地と周辺地形	7
第2節 安良川遺跡の砂丘形成と層序	8
第Ⅲ章 遺構・遺物	
第1節 遺構	11
第2節 土器	11
第3節 土製品	36
第4節 貝製品	36
第5節 鉄製品	37
第6節 石器	37
第Ⅳ章 土器型式分類	
第1節 分類方法	46
第2節 土器の胎土	48
第3節 土器分類基本資料	48
第4節 土器型式分類	48
第Ⅴ章 自然遺物	
第1節 安良川遺跡出土の植物遺存体（札幌大学 高宮広士）	69
第2節 安良川遺跡から得られた貝類遺体 予報（千葉県立中央博物館 黒住耐二）	72
第3節 安良川遺跡から出土した脊椎動物遺体群の概要（早稲田大学 橋泉岳二）	77
まとめ	80
おわりに	98

挿 図 目 次

第 1 図	笠利町遺跡分布図	3
第 2 図	遺跡周辺地形図	5
第 3 図	安良川遺跡の砂丘形成概念図	6
第 4 図	調査区域図	7
第 5 図	サンプリング位置図	8
第 6 図	土層断面図	10
第 7 図	基本土層図	9
第 8 図	遺構配置図・ピット・土坑断面図	12
第 9 図	出土遺物分布図	13
第 10 図	A-1 区出土土器実測図 (1)	20
第 11 図	A-1 区出土土器実測図 (2)	21
第 12 図	A-2 区出土土器実測図	22
第 13 図	A-3 区出土土器実測図	23
第 14 図	A-4 区・B-1 区出土土器実測図 (A-4 区 1~10, B-1 区 11~20)	24
第 15 図	B-2 区・B-3 区出土土器実測図 (B-2 区 1~3, B-3 区 4~13)	25
第 16 図	B-4 区出土土器実測図	26
第 17 図	B-4 区・B-5 区出土土器実測図 (B-4 区 1~5, B-5 区 6~10)	27
第 18 図	B-5 区出土土器実測図	28
第 19 図	C-1 区・C-2 区出土土器実測図 (C-1 区 1~12, C-2 区 13~21)	29
第 20 図	C-2 区・C-3 区出土土器実測図 (C-2 区 1~3, C-3 区 4~15)	30
第 21 図	C-3 区・C-4 区出土土器実測図 (C-3 区 1~8, C-4 区 9~14)	31
第 22 図	D-1 区出土土器実測図	32
第 23 図	D-2 区出土土器実測図	33
第 24 図	D-3 区出土土器実測図	34
第 25 図	D-3 区・D-4 区・ベルト D1~E1 区・E-2 区出土土器実測図	35
第 26 図	土製品・貝製品・釣り針実測図	39
第 27 図	貝製品出土分布図	40
第 28 図	ヤコウガイ・フタ・貝その他出土分布図	41
第 29 図	炭化物・鉄器出土分布図	42
第 30 図	石器実測図 (1)	43
第 31 図	石器実測図 (2)	44
第 32 図	石器出土分布図	45
第 33 図	土器・骨出土分布図	51
第 34 図	A- I ・A- II 類底部実測図	52
第 35 図	B- III 類底部実測図	53

第36図	土器型式分類図	61
第37図	土器型式分類図(1)	62
第38図	土器型式分類図(2)	63

表 目 次

第1表	器種部分名称別分類	14
第2表	貝製品分類	40
第3表	石器出土表	45
第4表	底部胎土分類	54
第5表	形式分類	55
第6表	型式分類	56
第7表	壺形土器口縁部胎土分類	57
第8表	文様別胎土分類	58
第9表	鉢形土器口縁部胎土分類	59
第10表	口縁タイプ分類	60
第11表	出土時分類1・2・3・4・5	64

図版目次

図版1	遺跡遠景、近景、東側土層断面	82
図版2	遺物出土状況	83
図版3	ウニ土坑出土状況、平底土器出土状況	84
図版4	土器出土状況	85
図版5	無文貝符、有孔貝出土状況	86
図版6	オオツタノハ、貝ヒ、夜光貝、オカヤドカリ出土状況	87
図版7	石器、ツリバリ出土状況、共同調査員サンプリング協議	88
図版8	A-1区出土土器図版	89
図版9	A-2区～A-4区出土土器図版	90
図版10	B-1区～B-3区出土土器図版	91
図版11	B-4区・B-5区出土土器図版	92
図版12	B-5区出土土器図版	93
図版13	C-1区・C-2区出土土器図版	94
図版14	C-2区・C-3区・C-4区出土土器図版	95
図版15	D-1区・D-2区出土土器図版	96
図版16	D-3区・D-4区・ベルトD1～E1区・E-1区・E-2区出土土器図版	97

第Ⅰ章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過

遺跡の発見は昭和40年頃に道路工事中に遺物が発見され、役場に届けられていた。その資料は鹿児島短期大学南日本文化研究所の南島調査に参加していた白木原和美によって「大島郡笠利町の先史学的所見」として1971年に報告されている。

この土器について白木原は「土器は單一の形式に属し、全て平底の深鉢形土器の破片である。胎土は比較的細かく、石英の細粒を含んでおり、やや暗い赤褐色を呈する。」と器形と文様についてその特徴を述べている。さらに底部についてはオウハマボウの裏面の圧痕が残されている土器であることを報告している。土器は沖縄後期に時期区分され、奄美においては「兼久式土器」と命名されている土器である。また、兼久式土器を包層する遺跡のほとんどが新砂丘上に形成されていることも良く知られている。

用集落にある安良川遺跡は笠利町誌や白木原和美等によって紹介され、「くびれ平底」の兼久式土器を出土する遺跡として知られている。遺跡全体の範囲は不明であるが安良川一帯が砂丘であるため、この砂丘全体に広がっていたものと思われる。砂丘は畑地としてそれぞれの地主が所有し、その境界線は防砂林を兼ねてソテツが植栽されている。かつて奄美大島の砂丘に立地する畑の歴史的景観を残していた。これらの砂丘は近年の開発に伴なう工事用の敷砂やコンクリート用として使用されている。そして多くの遺跡は調査されることなく、ことごとく破壊されてきた現況にある。

今回の安良川遺跡は平成14年に地主による土の入れ替え申請があり、遺跡であれば調査を行って欲しいと地主の平山政彦より申し出があった。笠利町教育委員会は鹿児島県文化財課に連絡し、調査の対応と記録保存について協議を行った。その結果平成15年度に補助事業として取り組むことになった。調査は地主側から「夏植えサトウキビの植付けを9月に行いたいので発掘調査を早く終えて欲しい」との要望があった。町教育委員会は熊本大学に調査協力を求め、学術的な部分で熊本大学考古学研究室の応援を頂いた。発掘調査のフィールドマスターは当時熊本大学考古学研究室博士課程2年新里亮人が行った。

以上のような手続きを得て15年4月24日から5月5日まで記録保存のための発掘調査を行った。

第2節 調査の組織

〔発掘調査〕平成15年度

事業主	笠利町教育委員会		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会		
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美

		フィールドマスター	新里亮人（博士課程2年）
熊本大学考古学研究室生		樋口剛士（修士2年）、壱岐尾可奈子（以下学部3年）	
		沖謙介、神川めぐみ、児玉幹、三宮慶太、末永浩平、	
		八郷茉美、麓晃、前田真由子、松ヶ野恵、山下典子、	
		金姓旭（修士1年）、芝康次郎（修士1年）、	
		西嶋剛広（修士1年）、	
		緑川弥生（慶應義塾大学、博士課程1年）	
調査指導	熊本大学	教授	甲元眞之
共同研究	熊本大学	教授	木下尚子
	沖縄県北谷町	文化財係長	中村應
	沖縄埋蔵文化財センター		岸本義彦
	早稲田大学	非常勤講師	樋泉岳二
	千葉県立博物館	学芸員	黒住耐二
	札幌大学	教授	高宮広士

〔報告書作成〕

事業主体	笠利町教育委員会		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	中村武秀（平成16年10月1日まで）
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	山野利光（平成16年10月1日より）
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
整理作業指導	青山学院大学	教授	田村晃一

第3節 調査日誌主抄

4月24日～5月5日

発掘調査に入る前に地主さんにお願いし、教育委員会職員立会いのもとユンボで表土を剥いでもらう。

4月24日（木）発掘調査区周辺の伐採を行う。ハブ1匹捕獲。

4月25日（金）雑木の片付けを行う。

4月26日（土）熊本大学考古学研究室協力隊が参加し、発掘調査を始める。4×4のグリット設定などの測量を行う。

4月27日（日）各グリットの発掘調査をはじめる。遺物包含層上面は一括で上げる。表探資料も含まれる。

4月28日（月）Aラインの調査から進める。（北側より）セクションを確認しながら進める。

4月29日（火）Bラインに入る。出土遺物が多くなる。パソコンと光波を設置して地点を落としながら遺物をとりあげる。

4月30日（水）遺物を取上げながら掘り下げる。測量ポイントを移動する。

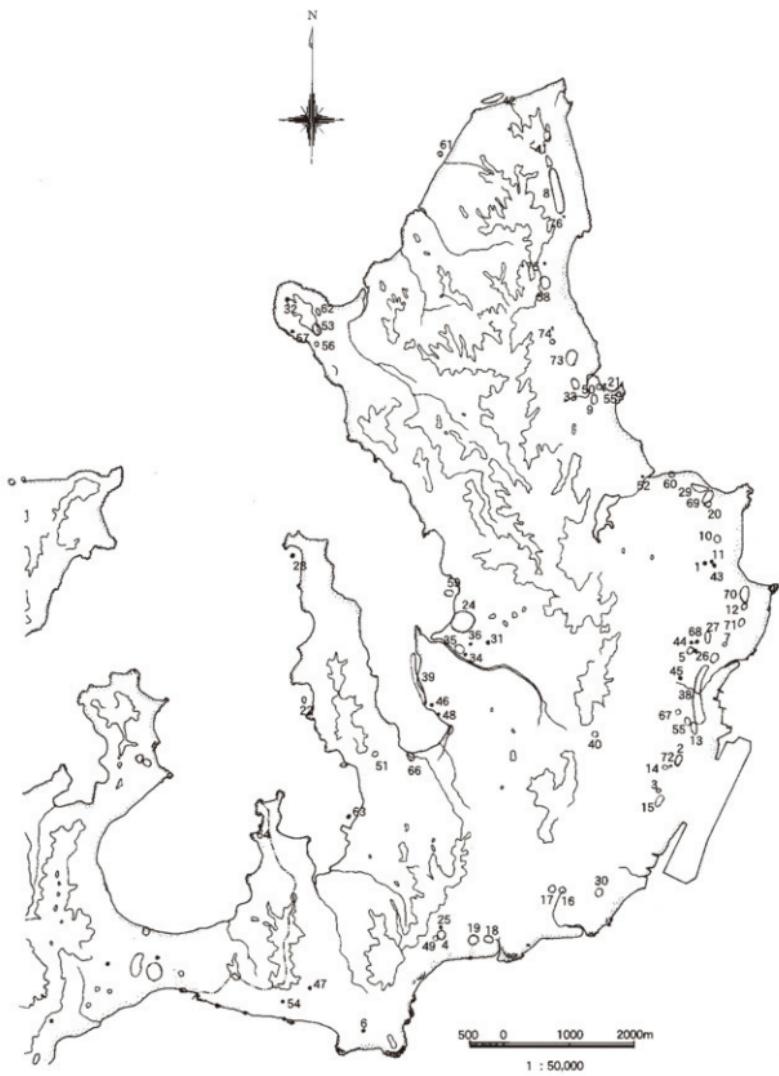
5月1日（木）Cライン、Dラインの調査に入る。調査区の包含層サンプリングをフリイにかける。

5月2日（金）Eライン、セクションベルト、植物、動物、貝類等のサンプリング調査を始める。

5月3日（土）サンプリング採集、セクション図の作成、遺物とり上げ作業も並行して行う。

5月4日（日）遺物とりあげを行い、さらに下層の確認を行う。

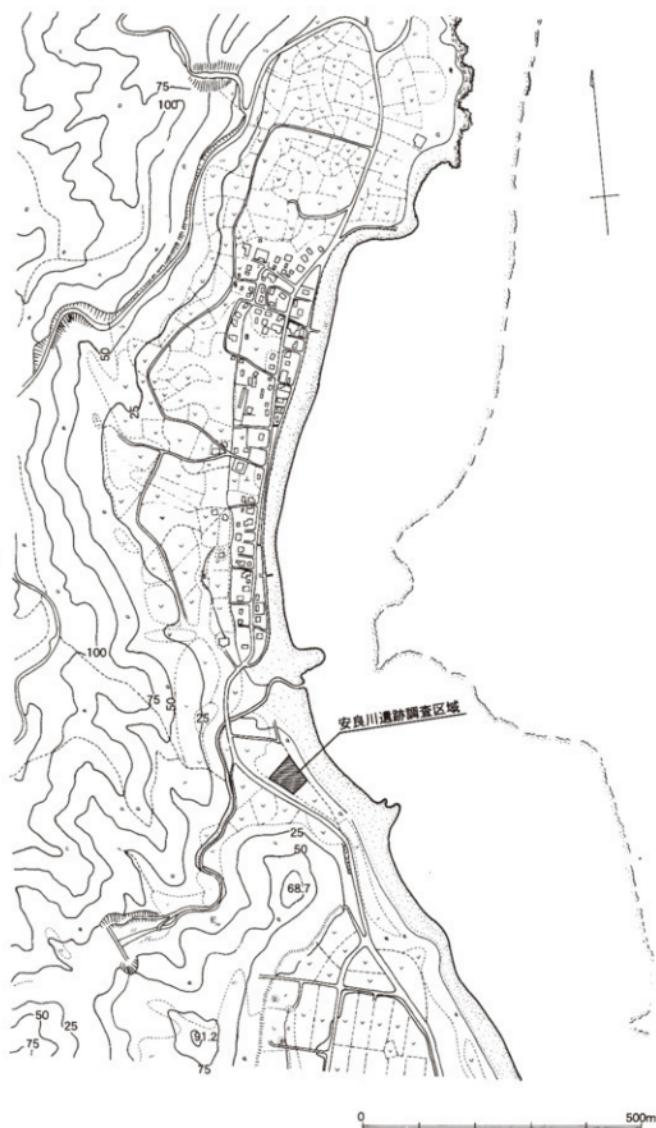
5月5日（月）機材とテント等の片づけを行い、終了する。



第1図 竜利町遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代
0	和野子フル墓	和野長ノ久	近世
1	喜子川遺跡	マツノト	古石器・縄文
2	上山田遺跡	万屋下山田	縄文、中世
3	ケジ遺跡	万屋ケジ	縄文
4	土居第2遺跡	土居	縄文
5	宇都小学校構内遺跡	宇宿166-口	縄文
6	明神山遺跡	用安字大瀬	弥生
7	宇宿船塗跡	宇宿港	弥生
8	用兵原遺跡	用兵原	古墳
9	辺留塚遺跡	辺留塚	古墳、中世
10	堀照寺跡	須野字崎原	古墳
11	マツノト遺跡	喜子川	6から12世紀
12	土盛唐津跡	土盛	古墳
13	万屋唐津跡	万屋	古墳
14	泉川舟塚跡	万屋字泉川	古墳から平安
15	長浜ノ久1, II, III	和野字浜金久	縄文から平安
16	跡田ヨツ井遺跡	跡田ヨツ井	中世
17	跡田大津遺跡	跡田大津	中世
18	跡田大神遺跡	跡田	古墳
19	土兵唐津跡	土兵	縄文
20	あやむる第1遺跡	須野字崎原	
21	辺留城	辺留城	中世
22	般兵遺跡	般兵	中世
23	箭久遺跡	宇宿字箭久	近世
24	水木字城	里宿地の又ほか	中世
25	イシヤ羽羽宿跡	土底イシヤ	縄文、弥生
26	宇宿河又遺跡	宇宿河又	縄文
27	宇宿大塚	宇宿大塚	縄文、弥生、中世
28	サウナ遺跡	喜瀬字サウナ	縄文、弥生
29	あやむる第2貝塚	泉野字大通	縄文、弥生
30	ナビヨ川遺跡	和野ナビヨ川	古墳
31	赤木大根音寺跡	里川道26ほか	近世
32	陣ヶ崎	屋仁ヤキンギ1550	
33	大島行所跡	大笠利子富城88	近世
34	大島代官屋敷	里11	近世
35	大島代官屋敷	里12	近世
36	大島代官屋敷	里910	近世
37	グママー	竹野703	
38	戦城	宇宿字前金久265	近世
39	津代古戰場	大字千石津代	近世
40	ハーダー	万履川勝勝	
41	用見崎遺跡	用見崎	古墳
42	ヤドリ浜遺跡	佐仁	古墳
43	土盛2遺跡	土盛	古墳
44	宇宿船型石棺墓	宇宿	近世
45	城町1フル墓	城町	近世
46	アナバトフル	手花郡穴瀬346	近世
47	篠の庭園	用安字当原1529	
48	手花郡墓石	手花郡	
49	土底ヤヤ遺跡	土底イシヤ	旧石器・縄文
50	富城	大笠利子富城	中世
51	大和城	手花郡大和城原	中世
52	崎城	須野字崎原	中世
53	接司城	屋仁字大山	中世
54	用安良城	用安字用城	中世
55	万屋集落	万屋	古墳
56	アニ城	屋仁舊生	中世
57	ヤアジガナガニ墓地	屋仁舊生	
58	用安良川遺跡	用安良川	古墳
59	船倉	船倉	
60	コビヨ遺跡	辺留字コビヨ	古墳
61	佐仁遺跡	佐仁	古墳
62	屋仁遺跡	屋仁	古墳
63	喜瀬石板墓	喜瀬	
64	一也1口墓	一也	近世
65	刃留城船型石棺墓	笠利宇宣城	近世
66	手花郡城	手花郡	中世
67	万屋城	万屋字城	中世
68	宇宿小学校第2遺跡	宇宿166-口	縄文
69	アヤマル城	須野字あやまる	中世
70	大笠第1遺跡	宇宿字大瀬	古墳
71	大笠第2遺跡	宇宿字大瀬	古墳
72	下山田トフル	万屋字山田	近世
73	笠利ウーハルグスク	大字城927-1	中世
74	笠利トフル	笠利	近世
75	用基地船型石棺墓	用	近世
76	用基春墓跡	用	近世
77	佐仁城	佐仁	中世

遺跡分布地名一覧表



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 安良川遺跡の砂丘形成概念図

第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺地形

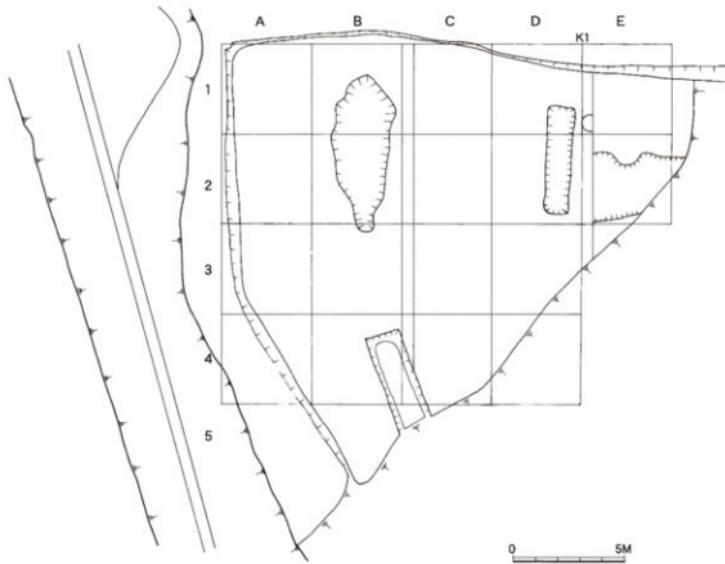
第1節 遺跡の立地と周辺地形

笠利町東海岸沿いは発達した大小の砂丘が用岬から赤尾木地峠まで約19kmにわたって形成されている。砂丘形成後には多くの遺跡が立地しており、東海岸の19kmは先史遺跡の宝庫にもなっている（第1図笠利町遺跡分布図）。

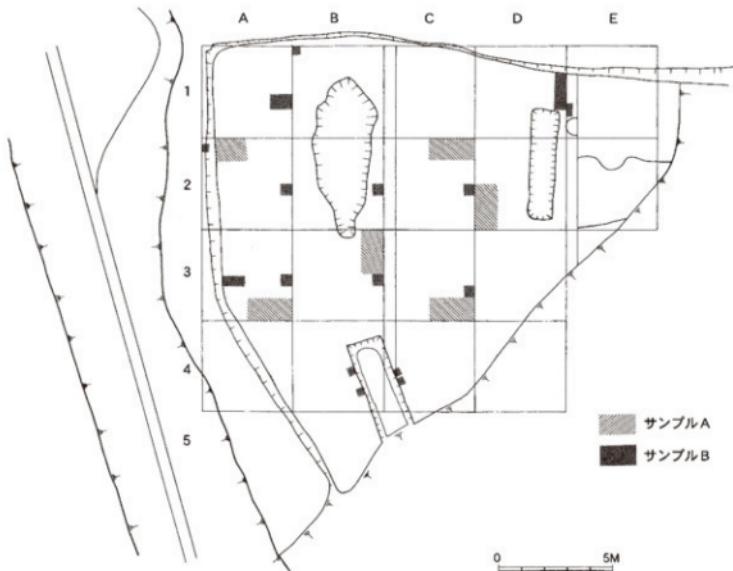
安良川遺跡はその東海岸北部に位置する。遺跡は笠利町の中央を走る山脈がやや窪んでおり、その谷間に安良川が集落を形成する砂丘と安良川遺跡を形成する砂丘を分断している（第2図遺跡周辺地形図）。

砂丘は東側に弧状をなす集落と遺跡を形成する南側突端部分の約1kmにわたり堆積している。砂丘北側は現集落を有し、後方西側は低湿地をなし、段丘から山に続く。南側砂丘も同様である。砂丘後方は低湿地をなし安良川が西側から北側へ流れている。砂丘を形成する東側の前面は発達したリーフに恵まれ、年間を通して季節の魚貝類が今でも豊富に採れる。砂丘の形成は遺跡の立地する砂丘と現砂丘の二つの砂丘に分けられる（第3図、安良川遺跡の砂丘形成概念図）。

調査区域は地形に合わせ、4m×4mのグリッドを設定した。西側から番号で1, 2, 3・, 北側から南側にA,B,C・とした（第4図 調査区域図）。遺物取り上げや層序はこの名称で行っている。自然遺物のサンプリングも第5図にサンプリング箇所を示している（第5図サンプリング位置図）。



第4図 調査区域図



第5図 サンプリング位置図

第2節 安良川遺跡の砂丘形成と層序

砂丘生成については1961年（昭和36年）に大西正巳・近藤正史の『砂丘のおいたち』に次のように紹介されている「一般的な砂丘生成は沿岸州形成後隆起が続き、沿岸流と波浪が砂を汀線付近に打ち上げ、さらに卓越風が砂粒を転々移動させて沿岸州の高さを増し、遂に砂丘をつくりあげる。」とされている。湾入した地形は湾口付近が砂州や砂丘によって塞がるので波や潮流の影響も少なくなるため、土砂の沈積が急速に進んで沖積平野を形成することも指摘している。大西・近藤は鳥取砂丘の形成をとおして砂丘の変遷をまとめている。洪積世以後長年月にわたる海底砂の供給は、砂丘形成にこと欠かなかったとしている。古砂丘は火山灰に覆われ砂丘の安定を生み、植生の繁茂、人類の居住、北西の季節風による砂丘の侵食、分断などの変化をあげている。さらに強風が古砂丘の海岸側を浸食し、内陸部まで砂を飛ばして、堆積を続けるようになると、これまで草原に鳥獣、海に魚貝類を求めて居住していた縄文、弥生人たちは内陸部へ居住地を後退させざるを得なくなつたことなどを砂丘の形成から指摘している。

安良川遺跡全体の範囲は部分的砂丘破壊の為不明である。遺跡は南側に立地する新砂丘上全体に広がっていたと思われる。遺跡の大半は1970年頃（昭和40年代）の発見当時から砂採りが行われており、土器や石器が採集されていた。その当時の遺物の一部分が役場に届けられている。その後、町史編纂委員会のメンバーも近くの砂採り現場で黒い層から土器を採集したとしている。

そのことからも遺物包含層は砂丘遺跡に見られる「クロスナ層」の形成があったことを示している。

砂丘形成はこれまで調査された遺跡から出土する遺物の状況から弥生期に寒冷期があり、砂丘形成が行われていることがわかる。安良川遺跡も遺物の特徴などから、遺跡は弥生期に砂丘形成が行われ、砂丘形成が落ち着き、植物が繁茂する頃に人々が生活を始めていることを示していると言えよう。

遺跡を形成する砂丘は教育委員会立会いのもと地主によって表土からクロスナ層直前の無遺物層が排除された。調査区砂丘の標高は約5mで、幅約80m、長さ約450mをなす。

地層は5層に分けられ、第3層の遺物包含層（クロスナ層）は1枚形成され単純遺跡である（第6図 土断面図）。

第1層 表土層

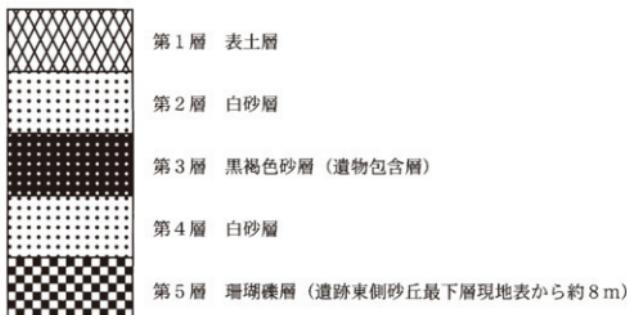
第2層 白砂層

第3層 黒褐色砂層（遺物包含層）

第4層 白砂層

第5層 瑞珊瑚層

安良川遺跡の基本層序は下記のとおりになる（第7図基本層図）

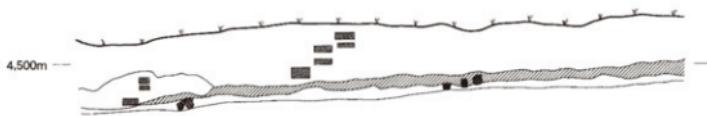


第7図 基本土層図

遺跡は新砂丘上に形成されており、砂丘最下層約8m下まで確認した結果、最下層からは珊瑚礁が出土し、砂丘形成時の汀線と思われる。出土遺物から砂丘は兼久式土器の時期以前の弥生時代に砂丘形成が行われたと考えられる。



<西壁セクション>



<北壁セクション>

■ 包含層
■ ■ ■ はサンプリング位置

0 1M

第6図 土層断面図

第Ⅲ章 遺構・遺物

第1節 遺構

安良川遺跡からはウニがたくさん入っていた土坑があり、「ウニ土坑」とよんでいる土坑とムラサキオカヤドカリがまとまって出土したビット、住居址と思われる砂利を敷き詰められていた部分を遺構として扱っている。

A. ウニ土坑

ウニ土坑は遺跡北側のE-1区南北セクション南よりから検出された。大きさは直径約1mの円形状をなす。深さは最深で約40cmになり、長い棘が集中しており、数回にわたって廃棄された状態である。ウニについては「貝類遺体」で黒住耐二が本稿に報告している。種類はナガウニ類で地区的古老たちに尋ねても「畑のコヤシとして利用するぐらいで食用にしたことはない。そんなのは食べられないよ。」と食用にはならないと言うことである。何らかの形で魚貝類と一緒に捕獲され、土坑に廃棄されたのかもしれない。

B. ビット状遺構（第8図遺坑配置図・ビット・土坑断面図）

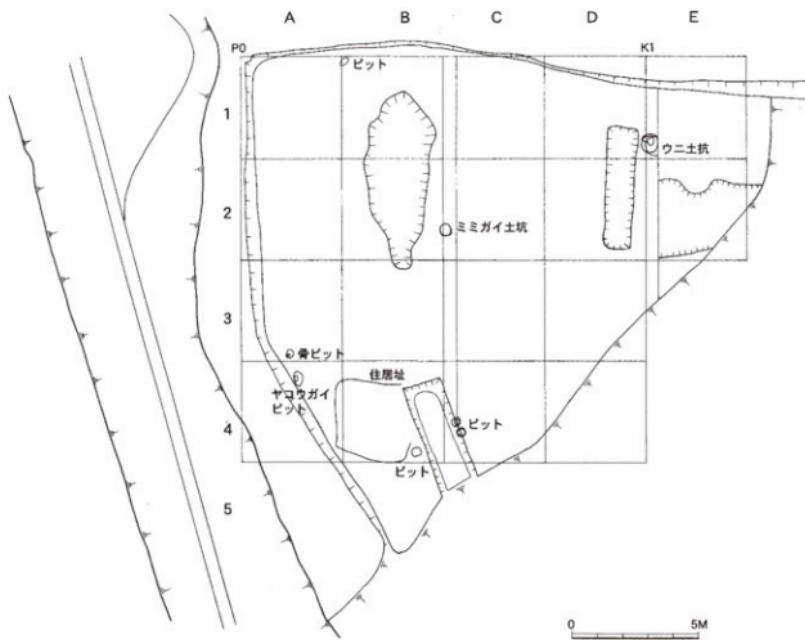
ビット状の掘り込みは2箇所検出されている。ムラサキオカヤドカリはA-3区土層断面図にかかる。幅約30cm深さ約40cmの掘り込みの中に、詰まった状態で出土した。貝殻はチョウセンザザエの大小の殻に入っているがいずれも殻に閉じた姿で出土している。ムラサキオカヤドカリは現在奄美地区では天然記念物として保護されている種である。出土状態が重なってヤドカリが詰まった状態で出土していることからバスケット状の籠に入れられていたと思われるが不明である。また、食用していたのかどうかも不明である。まとめて殻に入った状態から判断して、湯がかれた物と思われる（第6図、ムラサキオカヤドカリ出土断面）。近くには夜光貝の入った掘り込みも確認されている。B-5区搅乱区断面には幅約40cm、深さ約50センチのビットが3層からの掘り込みとして確認されている。このような状況から敷きジャリ部分は住居址としての可能性が残される。

C. 住居址

A,B-3,4区は方形にジャリが敷かれたような状態もあり、住居址と考えられる。3m×3mの大きさで東側搅乱断面にビットが確認されるなど周辺全体から考慮すると住居址としての可能性は高いと思われる。

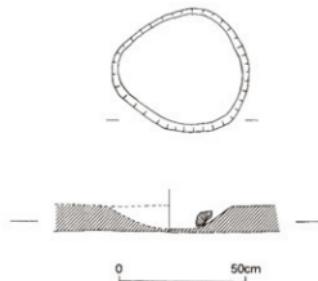
第2節 土器

安良川遺跡出土の土器は無紋で3cm前後以下の物については整理資料からはずした。土器分類については第1表のとおり底部、口縁部、口縁直下、胴部、その他、外来土器に分類した。分類資料は各グリットごとに数を表し、総数1293点である。出土遺物は第9図のとおり、搅乱部分を除き調査区域全体に広がる。貝製品と土器はほぼ同様にまとまる部分も見られるが、夜光貝は全域にわたっている。土器型式分類については第IV章に記した規準で行った。



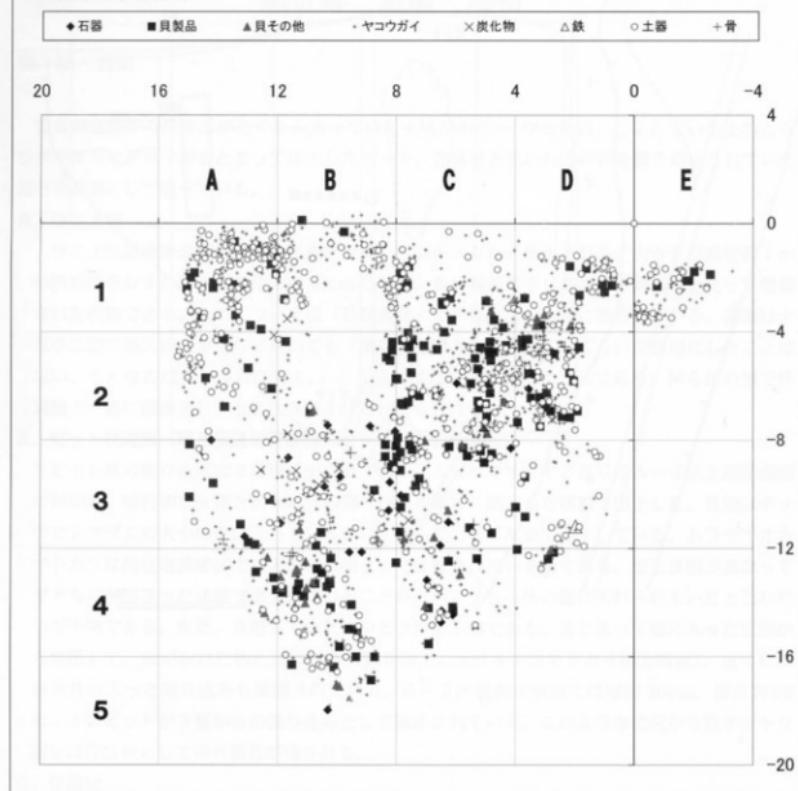
ミミガイ溜り土坑

ピット状遺構



第8図 遺構配置図・ピット・土坑断面図

遺物分布表図



第9図 出土遺物分布図



遺物出土状況西側より

A1	底 部	29		
	口 緑 部	61	87	
	口緑直下	26		
	胴 部	44		161
	そ の 他	1		
	外 来	0		
A2	底 部	12		
	口 緑 部	22	31	
	口緑直下	9		67
	胴 部	24		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
A3	底 部	7		
	口 緑 部	13	18	
	口緑直下	5		31
	胴 部	6		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
A4	底 部	2		
	口 緑 部	9	19	
	口緑直下	10		33
	胴 部	11		
	そ の 他	1		
	外 来	0		
B1	底 部	15		
	口 緑 部	26	33	
	口緑直下	7		75
	胴 部	25		
	そ の 他	1		
	外 来	1		
B2	底 部	4		
	口 緑 部	5	11	
	口緑直下	6		32
	胴 部	16		
	そ の 他	1		
	外 来	0		
B3	底 部	7		
	口 緑 部	12	23	
	口緑直下	11		50
	胴 部	20		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
B4	底 部	9		
	口 緑 部	16	31	
	口緑直下	15		82
	胴 部	42		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
B5	底 部	7		
	口 緑 部	13	18	
	口緑直下	5		48
	胴 部	21		
	そ の 他	2		
	外 来	0		

C1	底 部	13		
	口 緑 部	31	52	
	口緑直下	21		116
	胴 部	50		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
C2	底 部	19		
	口 緑 部	49	70	
	口緑直下	21		144
	胴 部	53		
	そ の 他	1		
	外 来	1		
C3	底 部	6		
	口 緑 部	18	33	
	口緑直下	15		66
	胴 部	26		
	そ の 他	0		
	外 来	1		
C4	底 部	7		
	口 緑 部	11	17	
	口緑直下	6		42
	胴 部	17		
	そ の 他	1		
	外 来	0		
C5	底 部	0		
	口 緑 部	0	0	
	口緑直下	0		2
	胴 部	2		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
D1	底 部	16		
	口 緑 部	25	43	
	口緑直下	18		104
	胴 部	45		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
D2	底 部	10		
	口 緑 部	36	44	
	口緑直下	8		110
	胴 部	53		
	そ の 他	2		
	外 来	1		
D3	底 部	13		
	口 緑 部	12	16	
	口緑直下	4		47
	胴 部	18		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
D4	底 部	4		
	口 緑 部	1	2	
	口緑直下	1		11
	胴 部	5		
	そ の 他	0		
	外 来	0		

E1	底 部	9		
	口 緑 部	18	21	
	口緑直下	3		60
	胴 部	30		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
E2	底 部	1		
	口 緑 部	1		
	口緑直下	0	1	4
	胴 部	2		
	そ の 他	0		
	外 来	0		
ベルト	底 部	0		
	口 緑 部	1	3	
	口緑直下	2		9
	胴 部	6		
	そ の 他	0		
	外 来	0		

底 部	190	
口 緑 部	380	573
口緑直下	193	1293
胴 部	516	
そ の 他	10	
外 来	4	

※すべての遺物個数。
カクラン・表採含み、細片は除く。

第1表 器種部分名称別分類

出土土器は各区に器種部分名称別に分類を行い、第1表にまとめた（第1表 器種部分名称別分類）。その結果底部が190点、口縁、口縁直下573点、胴部516点、その他10点、外来4点である。その他は器種名称のどの部分にあたるか不明であるものを指す。外来は明らかに在地土器でなく、奄美以外から持ちこまれたものとされるものを充てた。

出土土器の実測は各区ごとにまとめて行った。各調査区は第4図調査区域図参照。

A - 1 区出土土器（第10、11図、A - 1 区出土土器実測図）

第10図1は広口壺に分類している。無文で口縁部が少し絞られ直口タイプである。2は深鉢形に分類、無文で口縁部は直口に近い。3は広口壺に分類している。口縁部分が絞られ、口縁は直口からやや外反する。1と同様に無文、広口壺である。4、5は無文土器で口縁部分がやや外反する鉢形土器。6、7、8は凸帯刻目を有する壺形土器と鉢、變形土器に分類。8は太目の貼り付け凸帯文に2単位の刻目を有する。口縁部は大きく外反する。口唇部分は笠状の物で削られ、器面調整されている。10から20、23は貼り付け刻目凸帯文と沈線文の組み合わせである。11、14、16、19は貼り付け凸帯文が細く、凸帯文に刻みを入れている特徴がある。21、22、24、25、26、30は凸帯文が無く、沈線文だけによる文様構成である。34は粘土紐状になっているが口縁部の取手と思われる。

底部は28、29、31、32、35～38がA - Iタイプの直行型底部である。いずれも底面に葉痕を有する。32、35、36、38は図面では底部がややくびれているように見えるが土器製作時の底面をつくる粘土板が少し出ているためである。直行のなかでもA、Bタイプに分けられる可能性がある。39、40、41はB - IIIに分類され、壺形土器をなす泥質土器。40は粘土板をそのまま摘み上げた底部である。壺形土器の底部も数タイプに分類される。41はA - IIタイプの底部でくびれ平底をなす。42、43は粘土板が器面調整されていない状態で残る。ここでは特殊なタイプとしてCに分類した。

A - 2 区出土土器（第12図、A - 2 区出土土器実測図）

1、2は無文タイプの口縁でやや外反する。いずれも内面にはけ目調整痕を有する。3、4は刻目凸帯文をなす土器である。3は泥質で壺形土器の口縁部、4は鉢形土器の口縁部である。5、8～12は特異な土器として分類される。5は貼り付け凸帯文が縦、横あり、刻目、沈線で文様構成がなされている。6は沈線文だけで壺形土器の口縁をなす。7は沈線文だけの文様構成である。8は沈線文だけの文様構成で口唇部に刻目を有する土器である。9は形状の良く分からぬ土器で、口縁部の立ち上がりが明瞭で口唇部は平に整形されている特徴がある。10は壺形土器の口縁部で口唇部分に刻目を有する。11は細い粘土紐に二叉連点文をなす。12は凸帯文に刺突文を有し、凸帯上部に並行に2条の鋭い沈線文を有する土器である。

底部13はA - Iの直行タイプ。15は壺形土器の底部で葉痕を有する泥質土器である。

A - 3 区出土土器（第13図、A - 3 区出土土器実測図）

1は無文土器。2は貼り付け刻目凸帯文で口縁部が外反する土器。3は刻目凸帯文に沈線を

有する土器で口縁は直口。4は直口口縁で沈線文を有し、土器製作時の指頭圧痕が残る。5は壺形土器で特異なタイプに入る。縦の貼り付け凸帯文と沈線による文様構成が行われている広口壺である。6は刻目凸帯文と沈線文を有する土器で口縁の形状が方形になると思われる。7は口唇部に刻目を有する土器。8は刻目凸帯文。9は口縁直下で沈線文だけの文様構成をなす。

底部10,13はくびれ平底でA-IIタイプに分類される。11は泥質で壺形土器の底部と思われる。底面に木葉痕を有し、くびれ部分がS字状底部をなす特殊なつくりである。

A-4区出土土器（第14図、A-4区出土土器実測図）

1,2は沈線文による文様構成が行われ、砂質で口縁部が外反する。3は沈線文で口唇部分に刻目を施している。4は口唇部分に刻目を施している。5は縦に凸帯を有する特異な土器に分類される。6,7は張り付け刻目凸帯文土器である。10は内面にはけ目調整痕がはっきり分かる。底部は8,9でいずれも砂質土器でくびれ平底のA-IIに分類される。

B-1区出土土器（第14図、B-1区出土土器実測図）

11は無文土器。12は刻目凸帯土器。13は深鉢形で凸帯文と凸帯文下に沈線文様を有する。内面に指頭圧痕が残る。14,15は沈線文による文様構成で15は壺形になる。16は遺物包含層上層一括資料として集められ叩き文を有する焼き物である。機械で遺物包含層まで掘り下げる時に紛れ込んだ可能性が残る。17は沈線文と口唇部分に刻目を有する土器である。18は刻目凸帯文土器で深鉢形をなす。20は底部で木葉痕を有する。外部に指頭痕、内面にはけ目痕を有する壺形の底部である。

B-2区出土土器（第15図、B-2区出土土器実測図）

1は壺形土器で無文の泥質である。口唇部が少し丸みを帯び、やや外反する。2は色調が燈色で口唇部が丸みを帯びて縦位の沈線を有する。色調、胎土から在来のものと異なり、外来土器の可能性がある。3はくびれ平底でA-II類に分類され、胎土は泥質である。

B-3区出土土器（第15図、B-3区出土土器実測図）

4から7は無文土器である。4は泥質で壺形をなす。5は口縁部分がやや内反する。6は口縁部分が外反する。7は内、外面にはけ目痕を有し、口唇部分が平坦になっている。8は薄手の泥質土器で薄い張り付け凸帯文状をなし、そこに刻目を有する土器である。9は沈線文を有する土器。10は沈線文を有し、口縁部分がやや内反する浅鉢形土器になる。11は口縁部が外反し、太目の沈線で横に梢円状の二重線をなし、特異な土器に分類する。

12はくびれ平底をなし、底面に葉痕を有する。A-IIに分類される土器。13は底面が底部の立ち上がりより少し出て立ち上がりが「く」の字状にやや広い、壺形土器の特徴をなす。底面に葉痕を有する砂質土器である。

B-4・5区出土土器（第16,17,18図、B-4,5区出土土器実測図）

1, 2, 3は無文の口縁部である。1, 2は口縁部がやや外反する。3は口縁部がやや内反し、浅鉢形になる。4, 5は口唇直下に貼り付け凸帯文・刻目を有する壺形土器である。土器の積みあげ痕がはっきりわかり、少々雑なつくりである。壺形土器の特徴でもある。6~8は貼り付け凸帯文に刻目を有する土器である。6は口唇部分に特徴がある。9は貼り付け凸帯文に刻目を有し、刻目上下に沈線文が施されている。10, 11, 12, 15は胎土が砂質で焼成、色調も似ており同一固体と思われる。縦の貼り付け凸帯文を有し、沈線文で区画された文様構成である。甕形土器に分類される。13は底部付近の形状が丸みをおび、口縁近くがやや外反する特徴から浅鉢形土器に分類した。文様は横位の沈線文で砂質土器である。14は内反し直口した口縁部に細い縦の貼り付け凸帯文を有する壺形土器である。16は口縁部分が内側に傾き、文様は沈線文で構成される壺形土器と思われる。17は直口口縁部に口縁部内側から縦の貼り付け凸帯文を有する特異な土器である。凸帯文の両端を押さえ、中央部分を空し、取っ手状になっている。

第17図1は口唇部にラクダ状突起を有し、沈線紋による文様構成である。頸部から口縁部分にかけて少ししほまり、口縁から口唇部分は「く」の字状に近いぐらい外反する甕形土器である。沈線文は横位上下にありその間に斜状沈線で文様構成がなされている。2, 3は沈線文による文様構成である。4, 5は泥質の底部である。4は壺形の底部で3はくびれ平底でA-II類に分類される。いずれも底面に葉痕を有する。

6~10はB-5区の土器である。6, 7は無文土器である。7は口縁部が少し外反する。8は底部から口縁にかけてひろがる無文の深鉢形土器である。9は口縁部が縮まり頸部に肩が出来た格好になっている。甕形土器である。10は貼り付け凸帯文に刻目を有する土器である。第16, 17図はB-5区出土の土器である。第18図1は刻目凸帯文を有する壺形土器である。2~4は貼り付け刻目凸帯文と沈線文による文様構成である。5は口縁部分が外反し、口唇部分には刺突連点文を有する。文様は横位に上下2条の沈線を有し、その間に2本単位の斜状沈線で文様構成がなされている。6は口縁部が外反し、刻目貼り付け凸帯文を有する。さらに口唇部直下に刺突文を巡らしている深鉢形に分類されている。7は頸部がしほまり縦位の貼り付け凸帯文を有し、太めの沈線で文様構成がなされている壺形土器である。

底部は8から11までである。8, 9はくびれ平底で底面に葉痕を有する土器でA-IIに分類される。10は立ち上がりが直行をなしA-Iに分類される。11はくびれ平底状をなし、泥質で壺形土器、B-IIIに分類される。

C-1区出土土器（第19図、C-1区出土土器実測図）

1, 2, 3は無文土器である。1は甕形をなす。4は貼り付け凸帯文を有し、表にはハケ目調整痕が残る。5から7, 9は貼り付け刻目凸帯文を有する。6, 9は壺形をなす。7は刻目凸帯上部に沈線文を有する浅鉢型をなす。8は無文土器で口唇部に刻目を有する。10, 11, 12はくびれ平底をなし、A-II類に分類される。13は泥質で壺形をなす。

C-2区出土土器（第19, 20図、C-2区出土土器実測図）

13から21まではC-2区出土土器である。13、14は泥質で広口壺の無文土器である。15は貼り付け凸帯文を有する泥質の壺形土器。16から19は貼り付け刻目凸帯文を有する。18は刻目凸帯文に沈線による文様構成がおこなわれ、内面には指頭痕がのくる。19は刻目凸帯文を有し、凸帯上部に沈線文で文様構成が行われている。内面に器面調整のハケ目痕がのくる。20、21は沈線文による文様構成である。

第20図1から3はC-2区出土土器である。1は壺形土器で口縁部には沈線による綫の斜状方形をなしている。口唇直下に有孔があり、内面には指頭痕が残る。3は貼り付け凸帯文を有する壺形土器である。2は底面を中空にした脚台底部をなしている。

C-3区出土土器（第20、21図、C-3区出土土器実測図）

4から10はC-3区出土土器である。4から6は無文土器で4、6には内面に指頭痕がのくる。7は無紋の深鉢形をなす土器である。8は貼り付け凸帯文を有する小型広口壺である。9は貼り付け刻目凸帯文を有する深鉢形土器である。10は南九州の特徴を持つ胎土で外来土器である。成川式土器で貼り付け刻目凸帯文を有し、外器面にハケ目調整痕がのくる。内器面は指頭痕あり。第21図1から8はC-3区出土土器である。1から4は貼り付け刻目凸帯文に沈線を有する土器である。1、2は凸帯文上部に沈線文を有し、3、4は凸帯文上下に沈線文を有する土器である。5は口縁部がやや外反し、口唇部に刻目を有する土器である。6は泥質の底部で底盤が器面調整されていない壺形土器と思われるがここでは不明のCに分類した。7、8はくびれ平底土器でA-II類に分類している。いづれも底面に葉痕を有する。

C-4区出土土器（第21図、C-4区出土土器実測図）

9から14はC-4区出土の土器である。9は貼り付け刻目凸帯文土器で深鉢形土器である。10は貼り付け刻目凸帯文に沈線を有する土器である。11、12と14は砂質でくびれ平底をなし、A-IIに分類される。13は形状の特徴がよく分からぬため一応不明のCに分類した。

D-1区出土土器（第22図、D-1区出土土器実測図）

1、2は泥質の無文壺形土器である。1は口縁部分が方形、または注口をなす土器と思われる。2は広口壺である。3は刻目凸帯文を有する土器。4は刻目凸帯文に沈線を有する深鉢形土器である。内面にはけ目調整痕あり。5は口縁部がやや外反し、口唇部分に刻目を有する。6は綫に凸帯文を有する広口壺形土器である。7は逆さC字状貼り付け凸帯文を連続するスセシニ當式とされる土器に類似する。8は細い貼り付け凸帯文に太目の沈線文を有する深鉢形土器である。9は貼り付け刻目凸帯文を「こ」の字状にしている特異土器に分類。10は泥質土器で色調は橙色をなす。裏面に「ハ」の字状の叩き目を有する土器である。これまで兼久式土器に叩き痕を有する土器は皆無であり、今後更に観察が必要な土器である。11から14はくびれ平底で底面に葉痕を有するA-II類に分類される土器である。15は泥質で底面に葉痕を有しない壺形土器の底部である。16は砂質土器で脚台をなしている。

D - 2 区出土土器（第 23 図, D - 2 区出土土器実測図）

1 から 4 は無文土器である。1, 2 は深鉢形土器である。1 は口縁部がやや外反する土器。2 は小型深鉢形土器である。3, 4 は壺形土器で、3 は広口壺に分類される。5 は貼り付け凸帯文土器である。6 は横位の沈線文に波状沈線文を有する。内面にも一条の沈線文をめぐらしている。7 は 2 条の沈線文を単位に文様を構成している。口唇部近くから頸部近くに縦の粘土紐状の取手を有していた痕跡が残る土器である。8 は太目の貼り付け刻目凸帯文を口縁部から斜状に貼り付けている壺形土器である。9 は口縁部に「こ」の字状の刻目凸帯文を貼り付けている。10 は壺形土器で長石、石英を含む外来土器である。11 は土器製作痕がはっきり分かる土器である。12 は直行底部をなす A - I 類土器。13, 14 はくびれ平底土器で A - II 類に分類される土器である。

D - 3 区出土土器（第 24, 25 図, D - 3 区出土土器実測図）

1, 2, 4 は無文土器で、1 は深鉢形をなし、2, 4 は同一固体と思われる壺形土器である。3 は口縁部がやや外反する貼り付け刻目凸帯文土器である。5 は泥質で壺形土器と思われる。胴部に縦の沈線文を有する。6, 7 は貼り付け刻目凸帯文土器で 7 は壺形土器である。9 は貼り付け刻目凸帯文に沈線文を有する深鉢形土器である。8, 11, 12 は直行をなす底部で A - I に分類される。10 は砂質で丸底をなす底部である。内面は輪積み痕を有し、はけ目調整痕が残る。14 はくびれ平底を有し、A - II 類に分類される。第 25 図 1 は壺形土器をなす太い粘土紐を輪積みにし、はけ目調整痕が内面に残る。頸部近くから底部まで残る土器である。

D - 4 区出土土器（第 25 図, D - 4 区出土土器実測図）

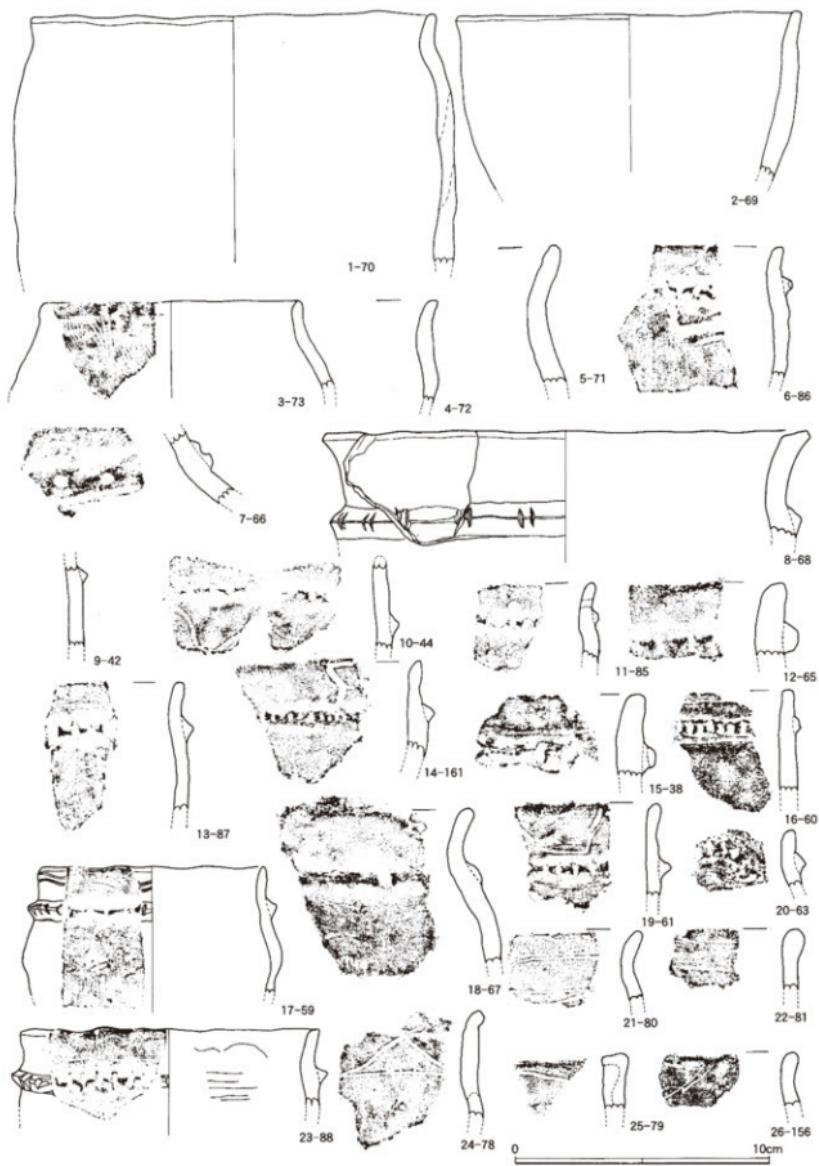
第 25 図 2 は直行底部で A - I 類に分類される土器である。3 はくびれ平底で A - II 類に分類される。いずれも砂質土器である。

E - 1 区出土土器（第 25 図, E - 1 区出土土器実測図）

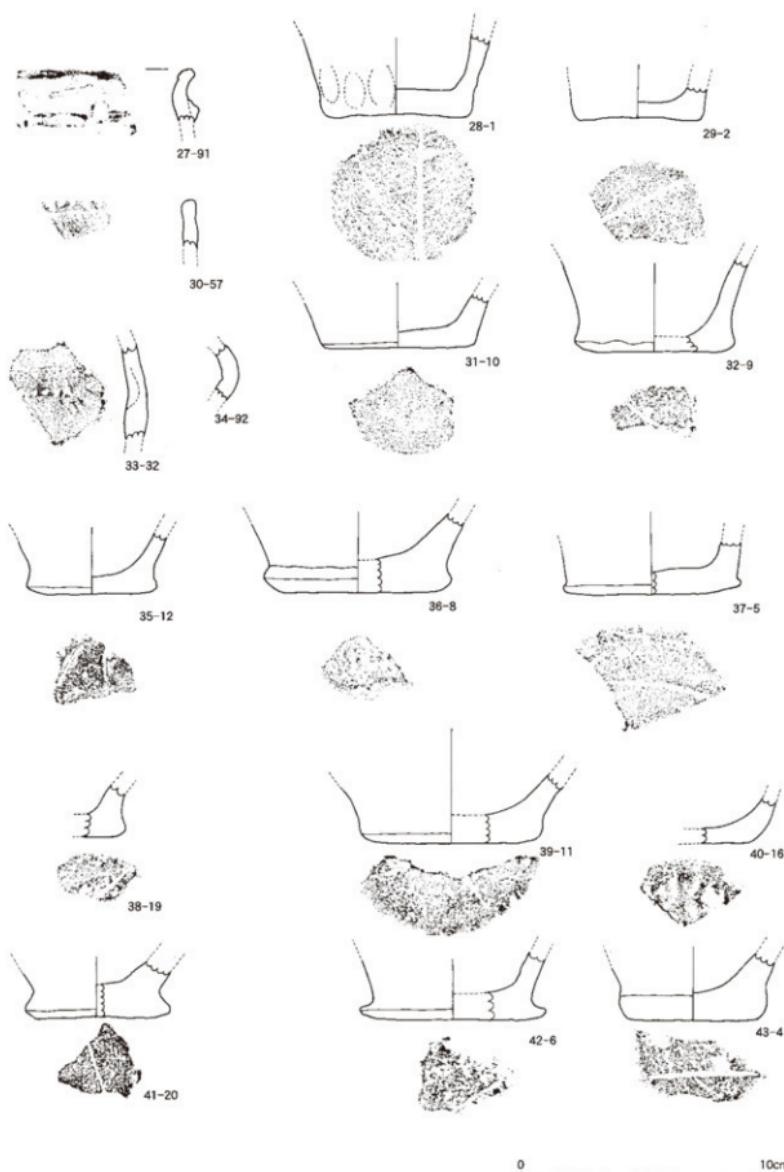
第 25 図 4 から 15 は E - 1 区出土土器である。5 は口縁部分が直口、6, 7 は外反する無文土器である。4 はウニベルト出土の壺形土器で内面にはけ目痕を有する。8, 9 は貼り付け刻目凸帯文土器である。10 は細い貼り付け凸帯文に沈線文を有する深鉢形土器である。11 はラクダ状凸帯を有する土器である。12 は口唇部から刻目を有する貼り付け凸帯文が縦にある。13 はくびれ平底で A - II に分類される。14 は直行底部で A - I に分類される。15 は泥質土器で壺形土器である。

E - 2 区出土土器（第 25 図, E - 2 区出土土器実測図）

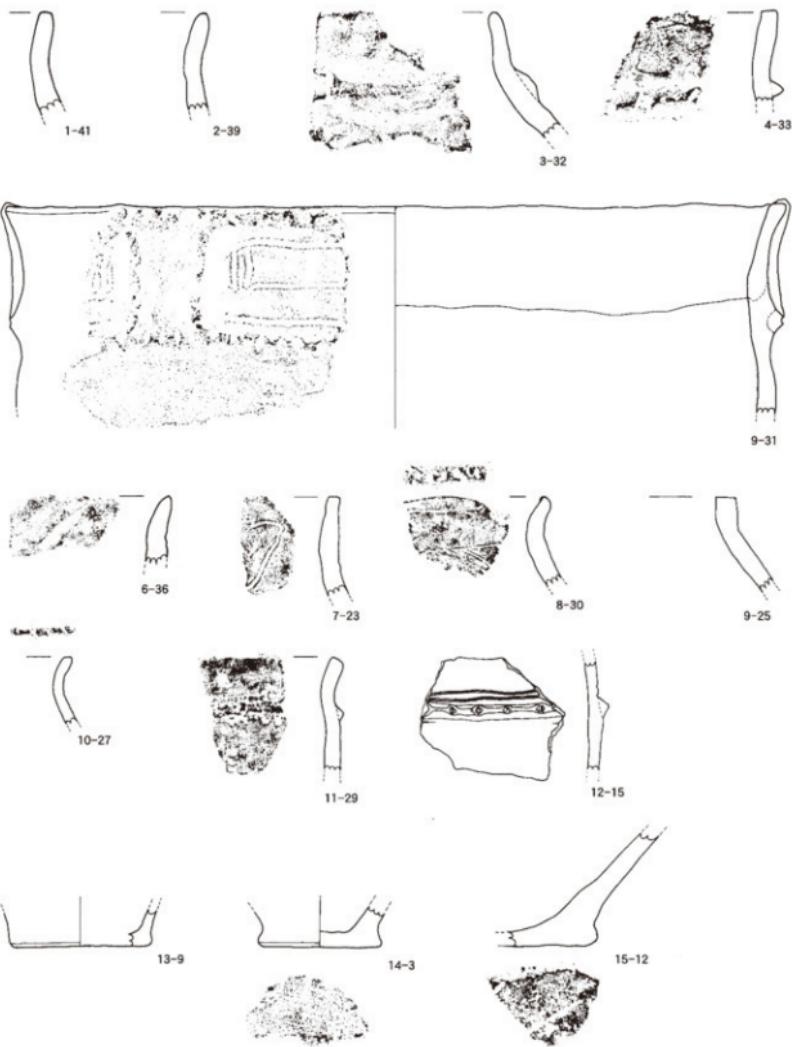
第 25 図 16, 17 は E - 2 区出土土器である。16 は貼り付け刻目凸帯沈線文を有する壺形土器である。17 は擾乱部分から出土しているくびれ平底土器で A - II 類に分類される。底面に葉痕を有する。



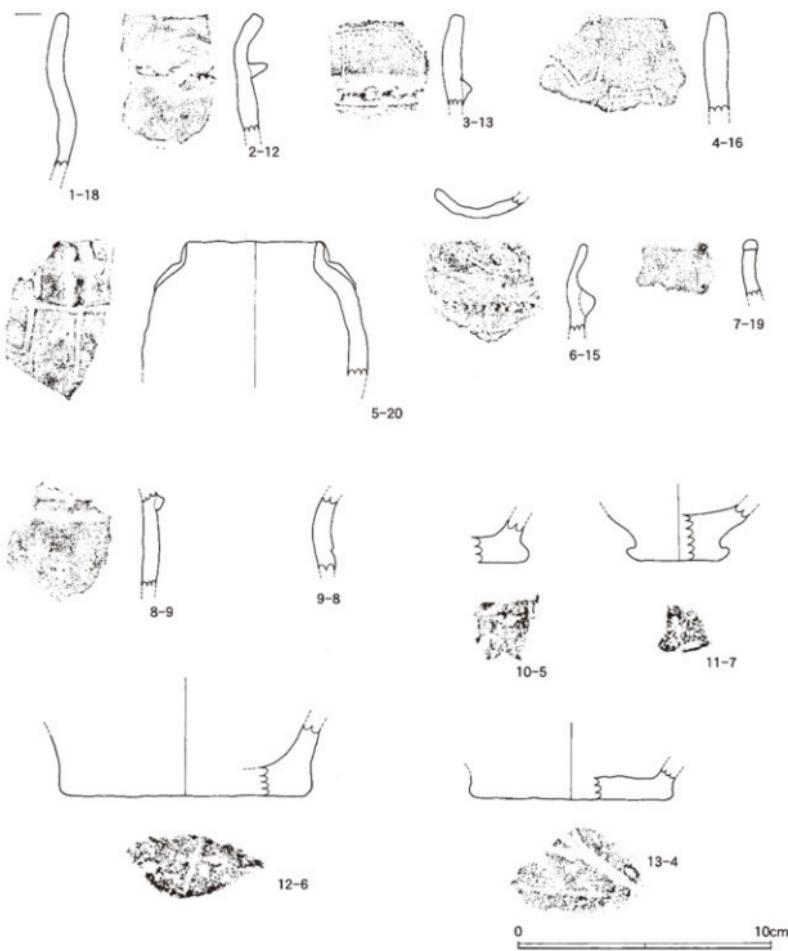
第10図 A-1区出土土器実測図(1)



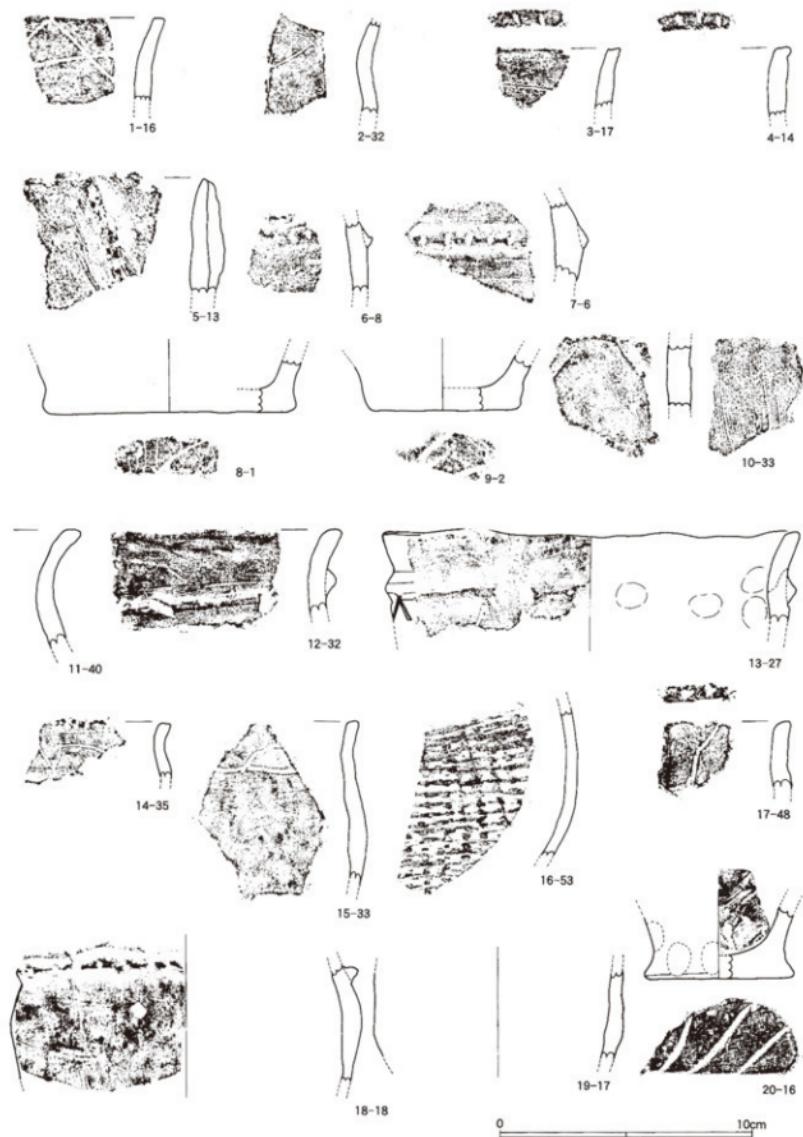
第11図 A-1区出土土器実測図(2)



第12図 A-2区出土土器実測図

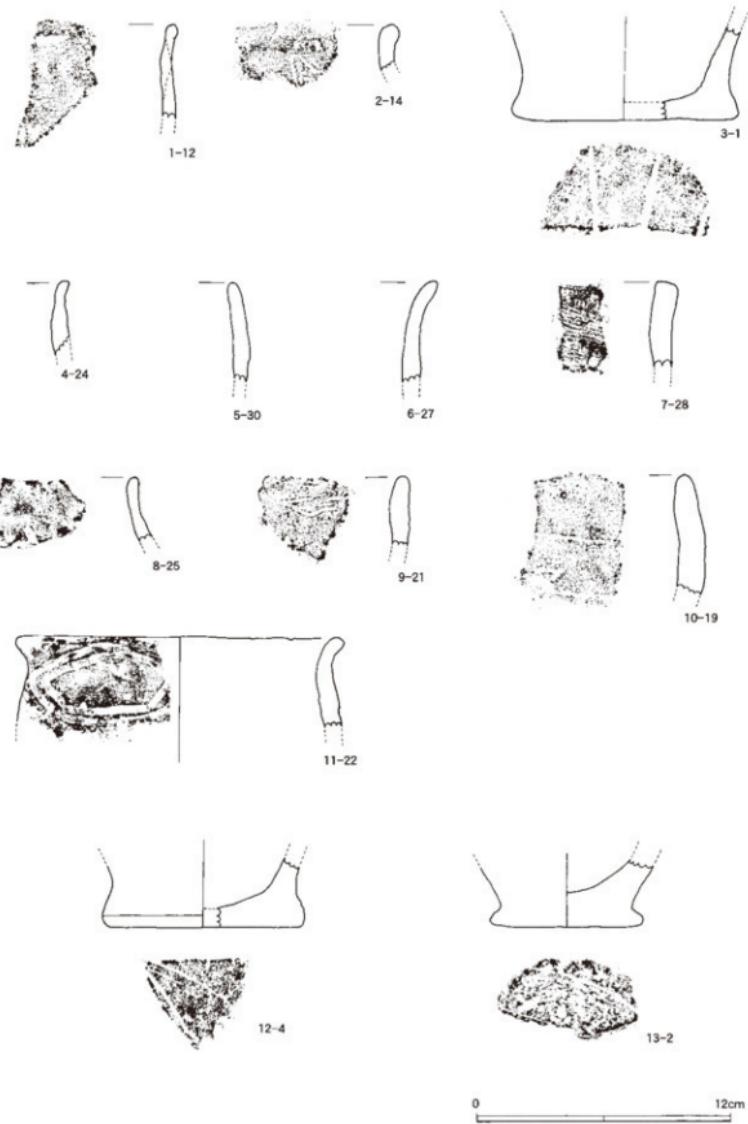


第13図 A-3区出土土器実測図

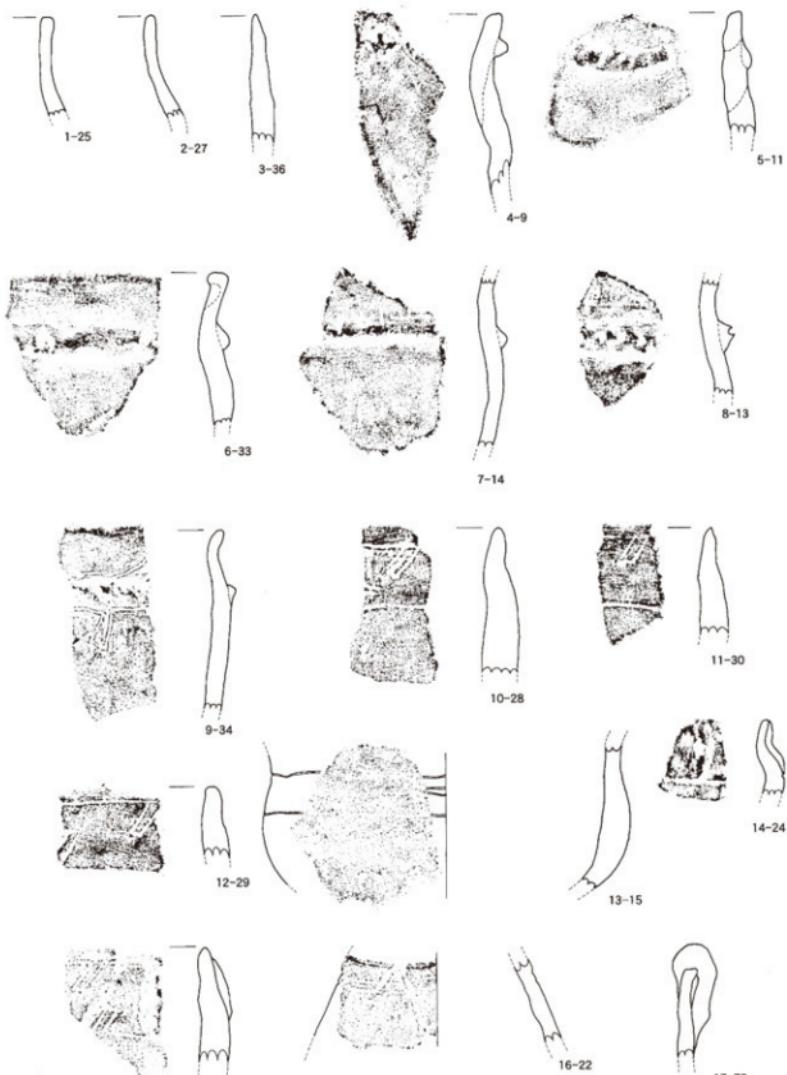


第14図 A-4区、B-1区 出土土器実測図

(A-4区 1~10)
 (B-1区 11~20)

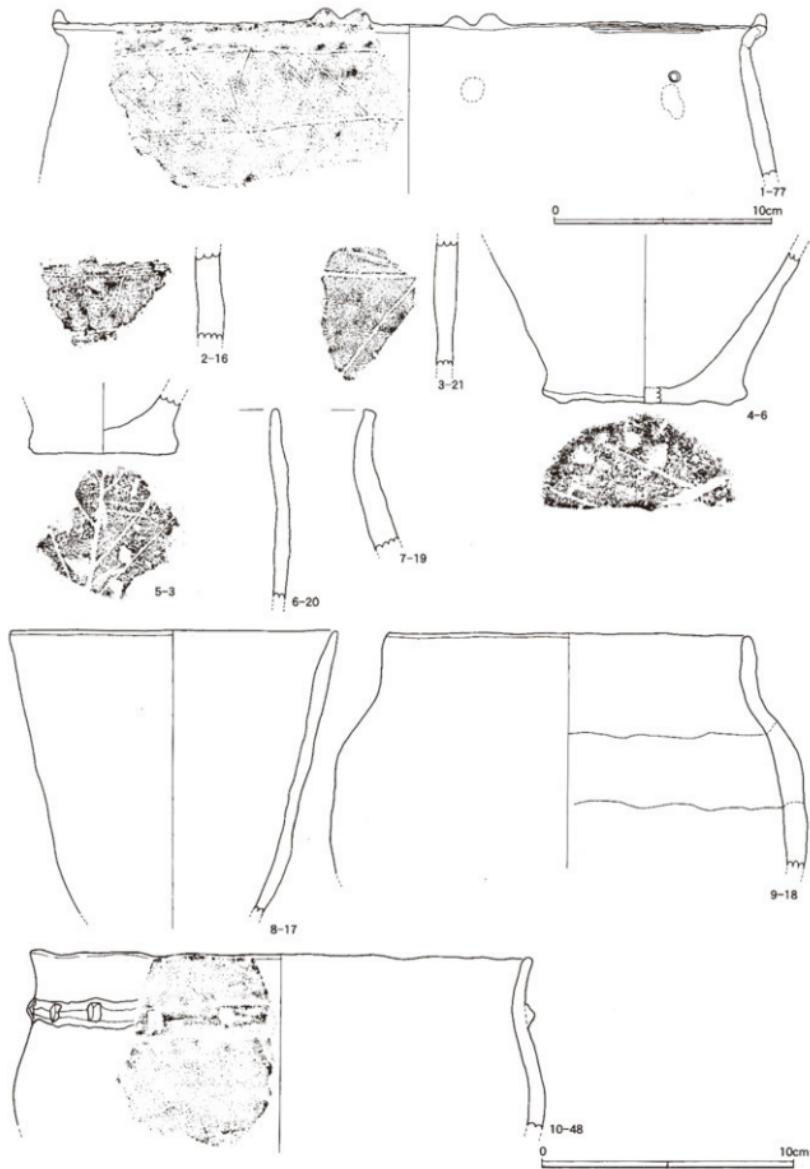


第15図 B-2区、B-3区 出土土器実測図
 (B-2区 1~3)
 (B-3区 4~13)



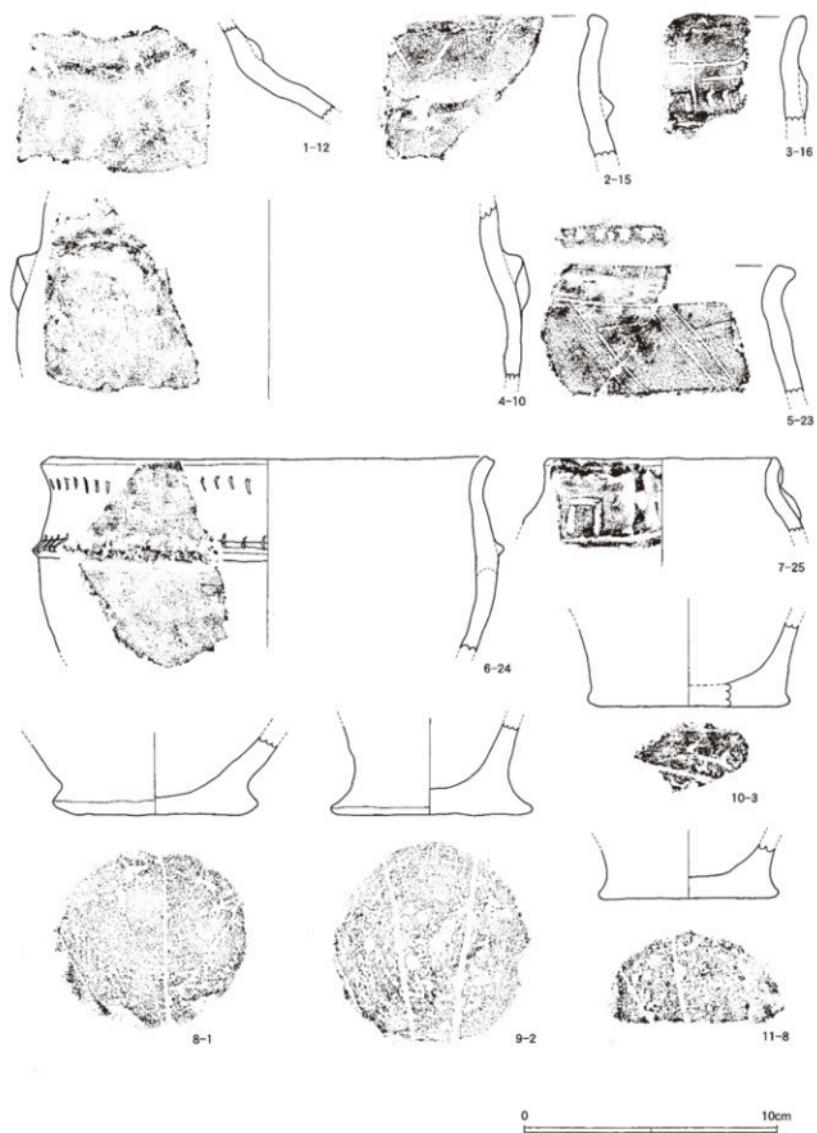
0 10cm

第16図 B-4区 出土土器実測図

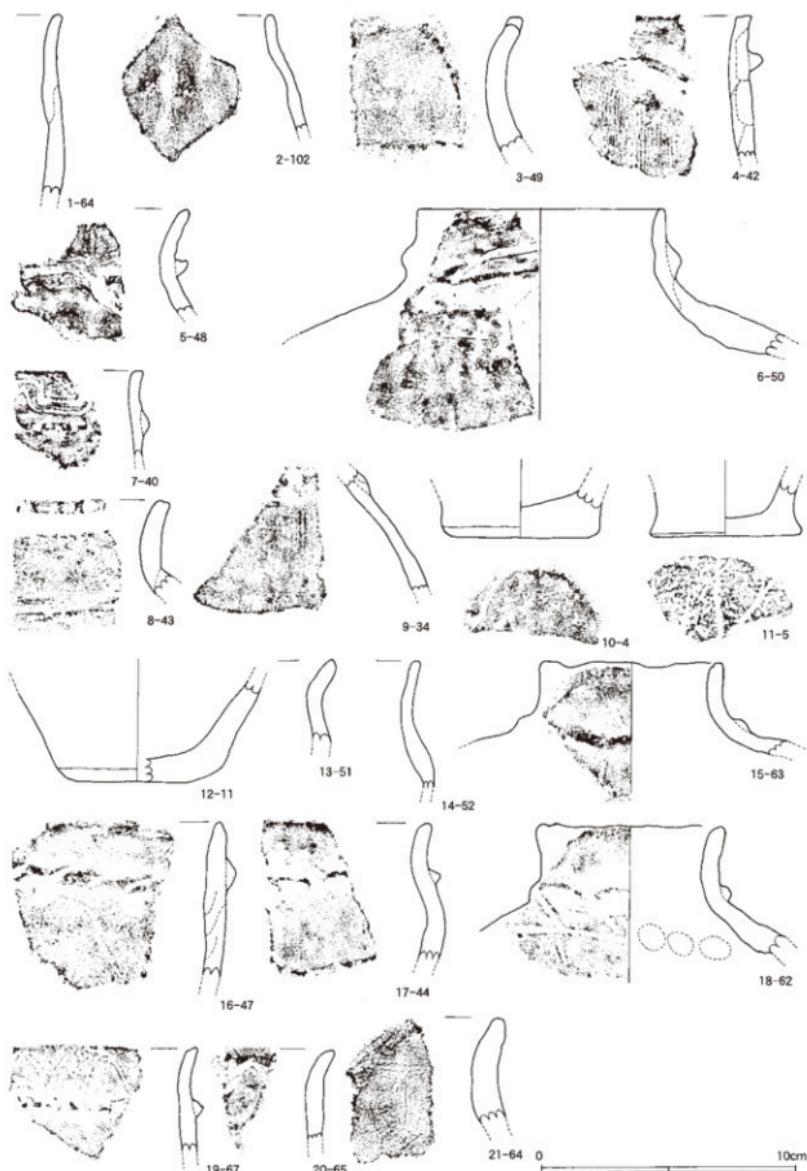


第17図 B-4区, B-5区 出土土器実測図

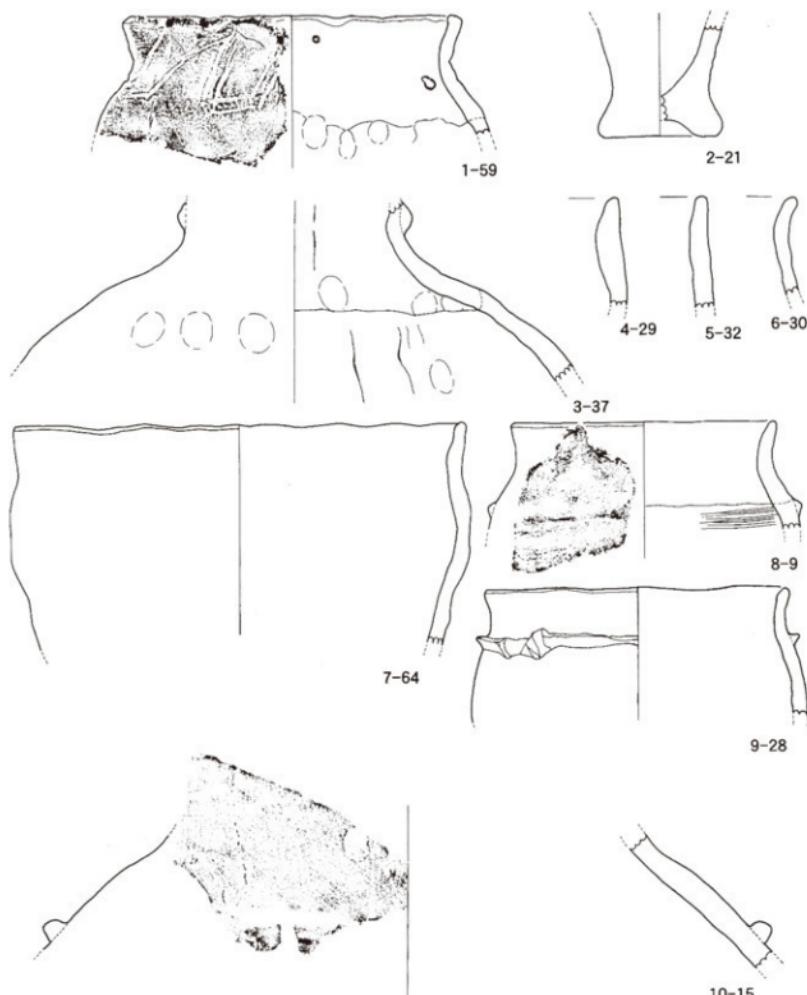
(B-4区 1~5)
(B-5区 6~10)



第18図 B-5区 出土土器実測図

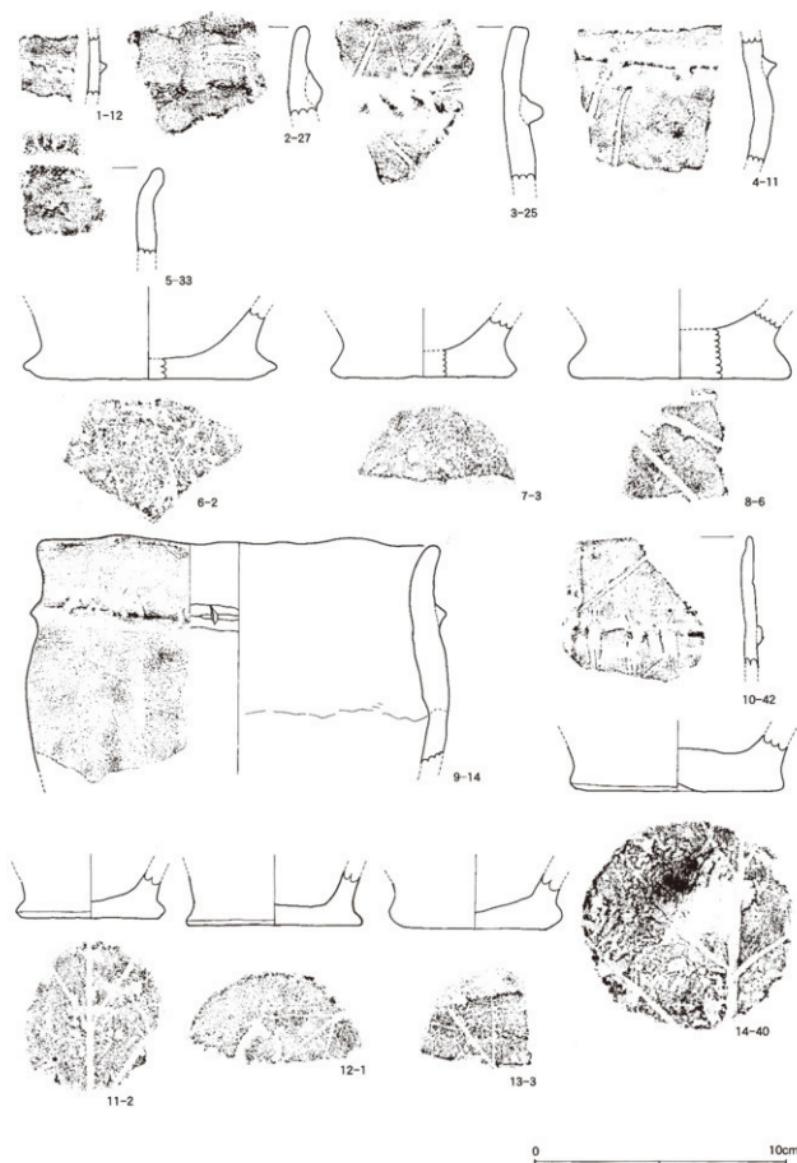


第19図 C-1区, C-2区 出出土器実測図
 (C-1区 1~12)
 (C-2区 13~21)

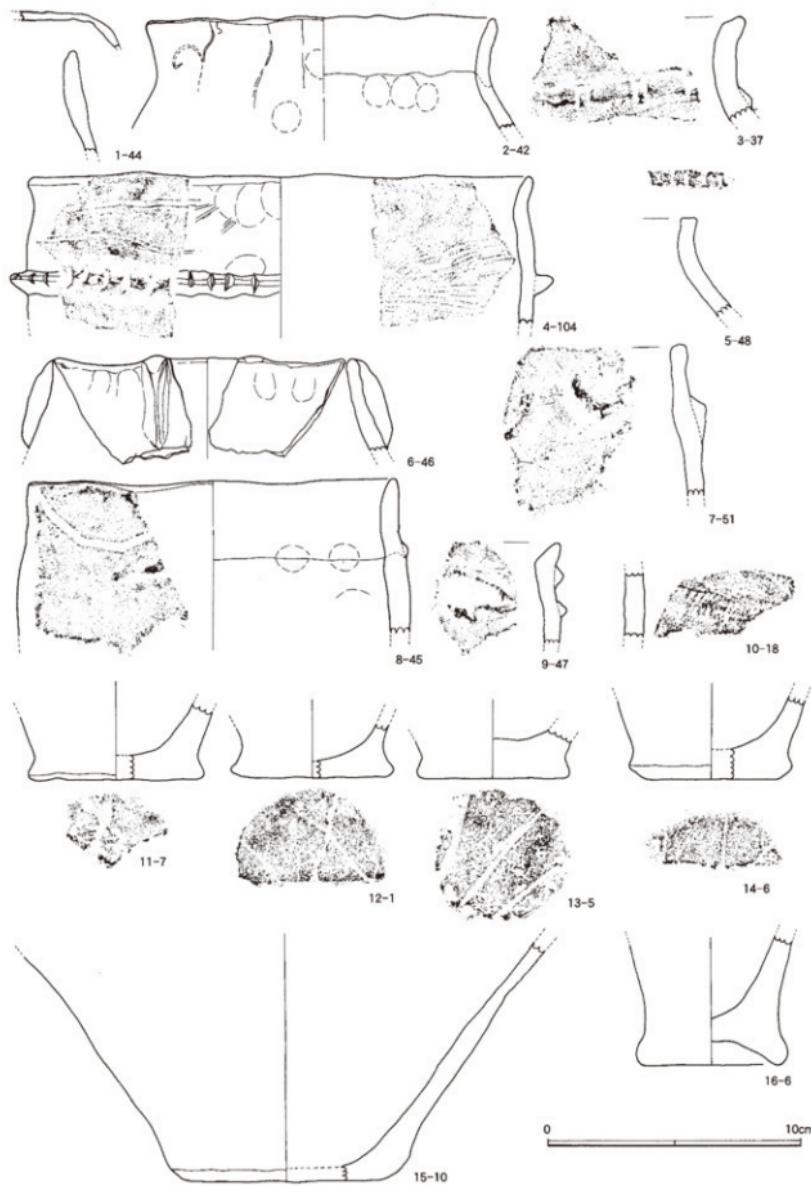


第20図 C-2区, C-3区 出土土器実測図
 (C-2区 1~3)
 (C-3区 4~15)

- 30 -



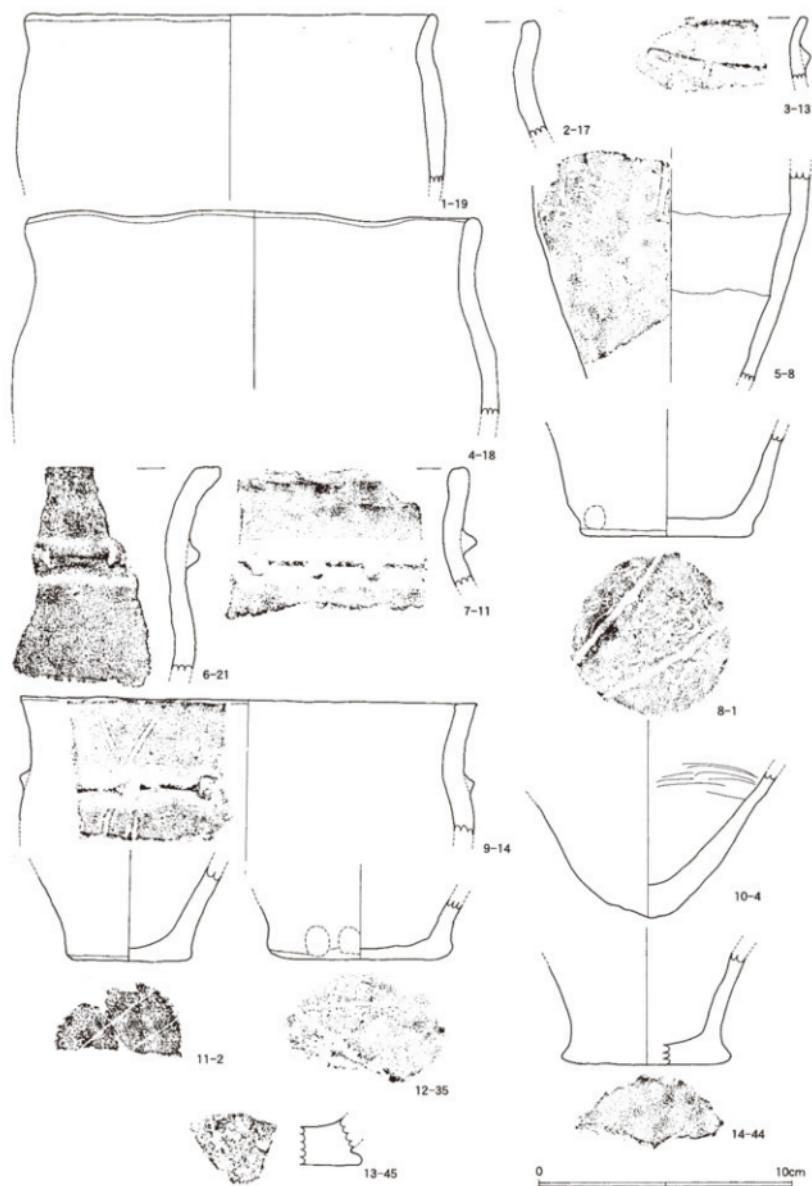
第21図 C-3区, C-4区 出土土器実測図
 (C-3区 1~8)
 (C-4区 9~14)



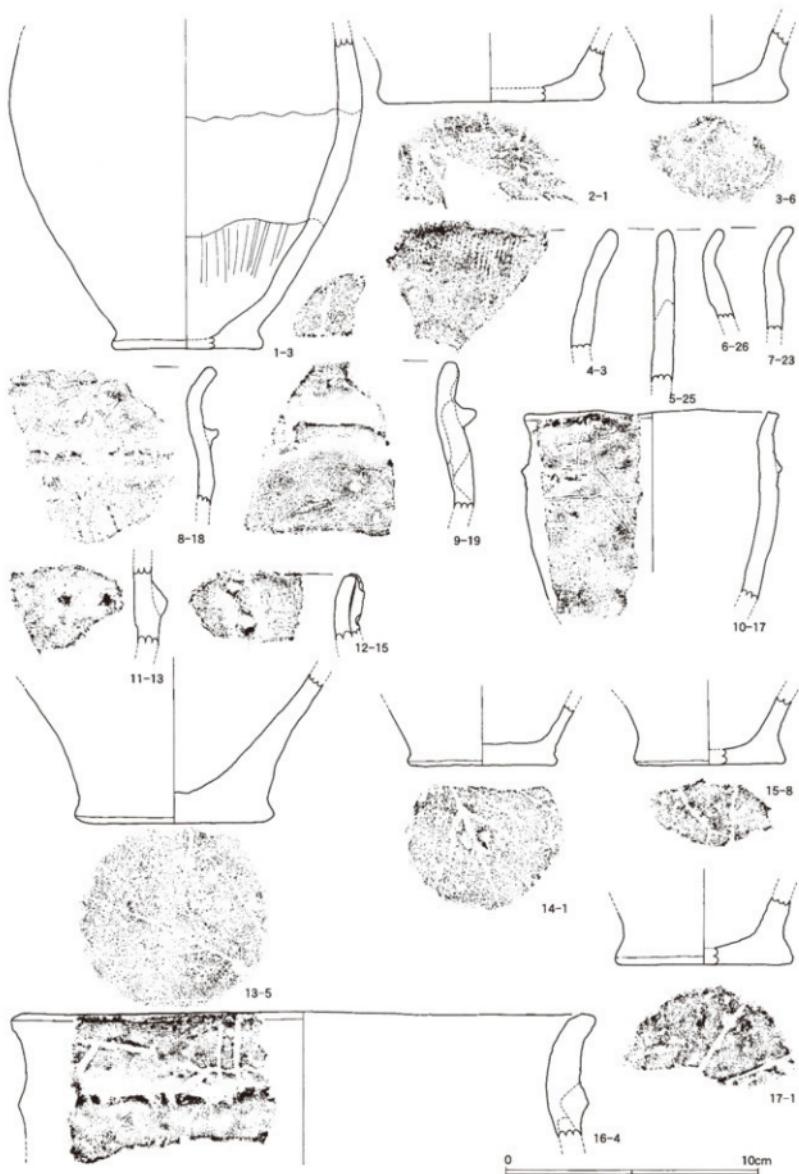
第22図 D-1区 出土土器実測図



第23図 D-2区 出土土器実測図



第24図 D-3区 出土土器実測図



第25図 D-3区, D-4区, ベルトD1~E1・E-2区 出土土器実測図
(D-3区1 D-4区2~3 ベルトD1~E1 4 E-1区5~15 E-2区16~17)

第3節 土製品（第26図、土製品実測図）

安良川遺跡出土土製品は4点を数え、1と2、4の3点は割れた土器の転用と思われる。

第26図1（D-2区）は有孔土製品である。焼成は良好、色調赤褐色、胎土砂質である。直系約4.4cmの円形状をなすが長径4.6cmとやや楕円状である。穿孔は楕円状の上部から約1cmのところにあり、両面穿孔で紐ズレ痕が見られる。表面には打ち欠いた跡にスグが付着、側面は磨き痕を有する。内側は指頭圧痕が残る。以上のことから土器を転用した垂飾品と思われる。第26図4（C-4区）は上部と思われる部分が欠損しており、全体的に舌状の形を成している。側面は磨かれ、やや内溝し、用途は不明である。長径4.7cmの土製品、焼成良好、砂質。第26図3（D-2区）は杯状土製品である。丸底をなしているが口縁部と思われる部分は削られている。手づくねで杯状に作り焼成後口縁部分を削り、調整したものか不明である。形状は接合で円形を成すが一部欠損している。直系5.7cm、焼成良好、砂質。第26図2（C-2区）変形方形をなす有孔土製品である。横に3つの穿孔があり、穿孔は両面からなされている。側面は削り調整されている。この土製品も土器の転用と思われる。焼成はややよし、胎土は泥質。

第4節 貝製品

安良川遺跡からは多くの貝が出土している。そのほとんどはリーフ内に生息している貝であるが食用貝類はイノーに生息している貝が少ないという結果が第5章第3節に黒住耐二が調査結果を述べている。珊瑚礁に囲まれた奄美の島々は釣りや潮干狩りなどの漁労活動が盛んで豊富に入手できると思われがちであるがそうでないということだ。発達した砂丘、発達したリーフに生息する魚介類を求めて先史人たちはやってくる。笠利の東海岸に形成される砂丘上にはこうした魚貝類をもとめて生活した多くの先史遺跡が残されている。その遺跡のほとんどは小規模遺跡であることに気づく。その遺跡から出土する貝は黒住の調査結果でも明らかにされているように食用に豊富な貝種があるということではない。食用にされる魚貝類はリーフ内に季節によって上がってくるものであり、いつでも毎日採れるということではないということである。現在でも潮干狩りに行くときは何を探るのが目的かはっきりしており、その目的の獲物がリーフに上がる季節と時間帯、場所を知っている。

砂丘上に形成される遺跡の特徴がこうした自然遺物からも読み取れることを黒住は指摘している。いまでもアンマ（ばあちゃん）たちは旧暦による満潮と干潮を読み、リーフ内に作られた自然の生簀「イノー」に出かける。それはまるで季節の畑に出来る野菜を収穫するようである。アンマ達は今日も潮の時間を読みながらイノーを見つめている。

安良川遺跡から出土する貝製品の材料も良い貝製品を作るためにより良い貝を確保しようと苦労したことだろう。当遺跡からは2点の無文貝符が出土している。

貝製品と貝の出土状況はヤコウガイ・フタが1,330点を数え、第28、29図の示すとおりである。遺跡全体に広がっているのが判かる。夜光貝以外の貝の出土は38点と少なく、出土第28図が示すとおりである。貝製品は全体の出土状況と第2表にデーターをまとめたにとどめた。夜光

貝は幼貝から成貝まで採集されており、貝種の中で特に多い。以上のことから、安良川遺跡の人々は、夜光貝を貝製品の原料以外に、その大半を食用として採集していた可能性を示す。このことは今後データーとしてまとめる必要がある。実測図と遺物の所見については機会を見つけて報告したい。

1. 無文貝符

安良川遺跡からはイモガイ製の無文貝符が2枚出土している。無文貝符第26図5、6（C-3区）は幅2cm、長さ2.9cmと長方形をなす。側面は4面ともきれいに磨かれて整形されており、表面も磨きがかけられている。厚さは約2mmで比較的薄い。文様が入っていないので貝符としては未製品、粗製品とされているが、ここでは無文土器があると同様に無文貝符として取り扱った。

貝符には主にイモガイ科の貝が利用されている。密な黒班列のあるアンボンクロザメガイは水深約2mの珊瑚礁の間に生息している。殻被が褐色のラミネート状になっており、黒班列の模様は殻被に覆われて見られない。大きさは殻長10cmぐらいが普通。第26図5は約1.8cm、長さ5.2cmと長方形をなす。側面は4面とも数回にわたって磨かれている。表も磨かれているが一部黒班文が3箇所に残り、厚さも約6mmと厚い。以上の特徴から貝種はアンボンクロザメと思われる。

2. 貝小玉

貝小玉はイモガイ類がほとんどである。出土状況は第27図、第2表のとおりである。貝玉、貝小玉については全面に研磨されたもの部分的なもの自然に出来るイモガイ類の殻長部分を採集し、研磨を加えたものなど全部で34点である。大半はフリイにかけて出土した。詳細については後日報告したい。

第5節 鉄製品（釣り針、第26図8、D-3区）

安良川遺跡からは鉄製品として釣り針が1点出土した。鉄の分析は行っていない。形状はU字形をなし、片方が長い。長さは3.3cmである。同様な釣り針は笠利町マツノト遺跡、笠利町長浜金久第1遺跡、名瀬市ワガネク遺跡からも出土している。時期も兼久式土器の時代で共通する。

釣り針出土区図は第29図のとおりである。

第6節 石器

石器の出土状況は第32図の示すとおりである。実測図には代表的なものにとどめた。データーは第3表のとおりである。

第30図1は長方形の形をした砥石のようである。4面が磨られており、先端部に巧打痕を有する。2は磨り石の破片である。円形状をなし、側面全体が磨かれている。3はやや丸みを帯び

た長方形状の石器である。表面と側面に2箇所の浅いくぼみを持つくぼみ石である。4は円柱状をなし、先端部分がかなり磨り込まれている。「すりこぎ状」石器である。5はほぼ円形の石器で石弾と思われる。使用痕などは確認できない。

6は石製品と思われる。楕円形をした同様の貝製品も出土していることから珊瑚に孔を有するものを利用した可能性が高い。孔が人工的かどうかは不明である。

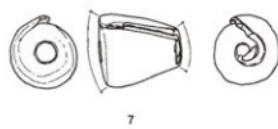
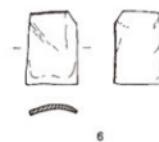
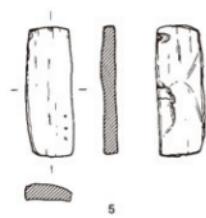
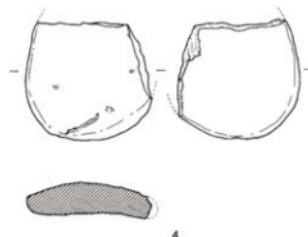
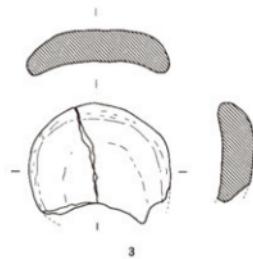
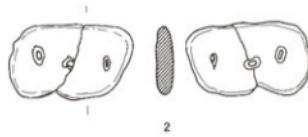
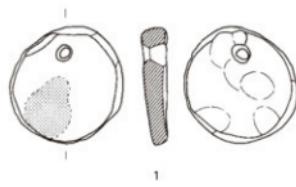
第31図1はクガニ石をくぼみ石として利用している。先端両側面が磨られている。どのような利用方法化は不明である。2も同様にクガニ石がくぼみ石として利用されている。くぼみ部分がかなり深く、半分から欠損している。



リーフで漁を行う人々



イノーで魚貝類を探集する人々

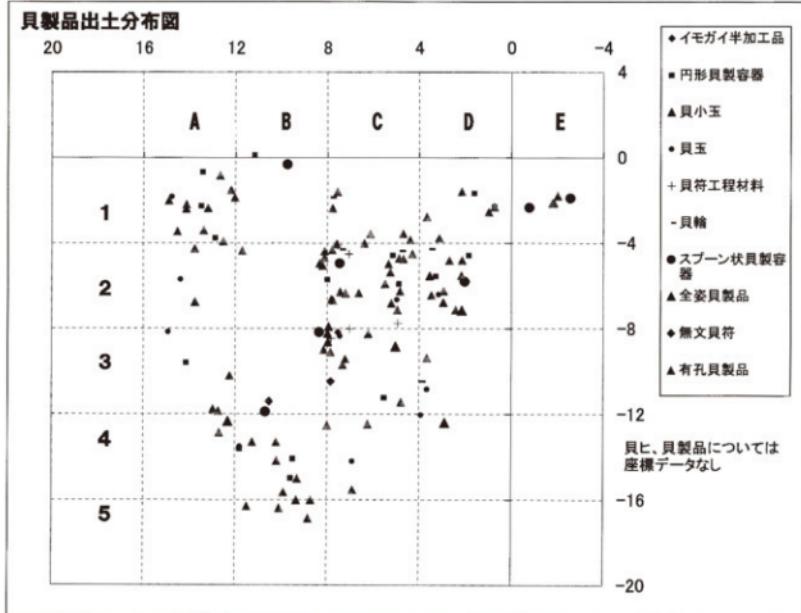


0 10cm

第26図 土製品・貝製品・つり針実測図

	有孔 貝製品	貝 玉	貝小玉	貝 輪	全 姿 貝製品	イモガイ 半加工品	貝符工 程材料	無 貝	文 符	円形貝 製容器	スプーン状 貝製容器	貝 ヒ	貝製品	不 明	計	
A-1	12	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	2	0	18		
A-2	4	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5		
A-3	5	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	9		
A-4	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
B-1	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	6		
B-2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5		
B-3	0	0	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	7		
B-4	4	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	7		
B-5	8	4	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	25		
C-1	8	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	12		
C-2	21	2	1	3	0	0	2	0	4	1	0	1	0	35		
C-3	6	1	2	0	1	1	3	1	1	1	1	0	0	18		
C-4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
C-5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
D-1	5	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	7		
D-2	11	1	6	1	1	0	0	0	2	1	1	1	2	0	26	
D-3	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5		
D-4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	
E-1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6		
E-2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
計	102	16	17	6	5	14	5	21	18	7	4	9	11	193		

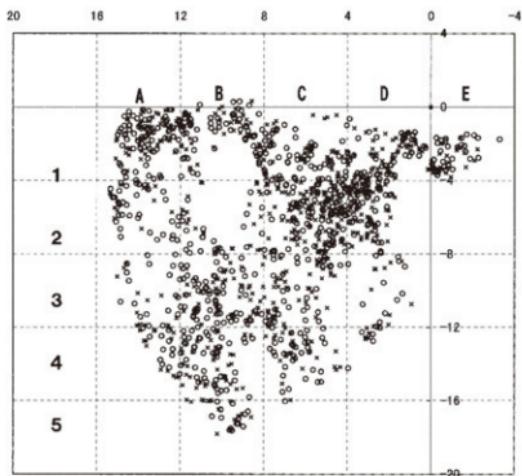
第2表 貝製品分類



第27図 貝製品出土分布図

ヤコウガイ・フタ出土分布図

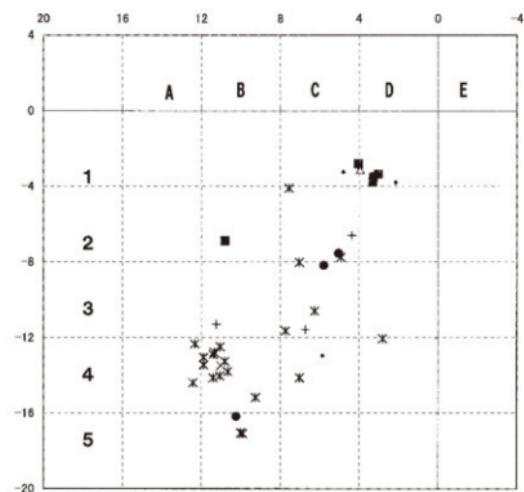
× ヤコウガイ ○ フタ



ヤコウガイ	636
フタ	694
総個数	1330

貝その他出土分布図

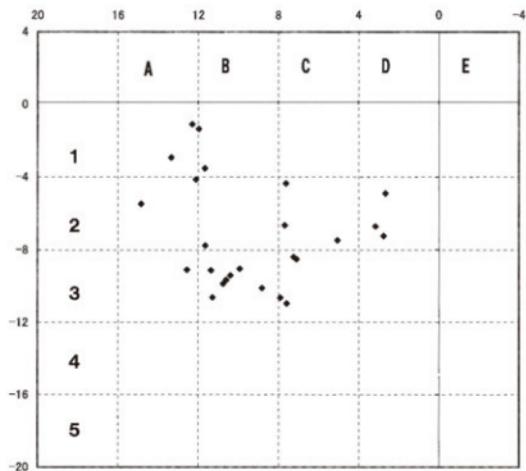
● ホラガイ ■ スイジガイ △ ゴホウラ × サザエ * イモガイ ● タカラガイ + 不明貝



ホラガイ	3
イモガイ	22
ゴホウラ	1
サザエ	1
タカラガイ	3
スイジガイ	5
不明貝	3
総個数	38

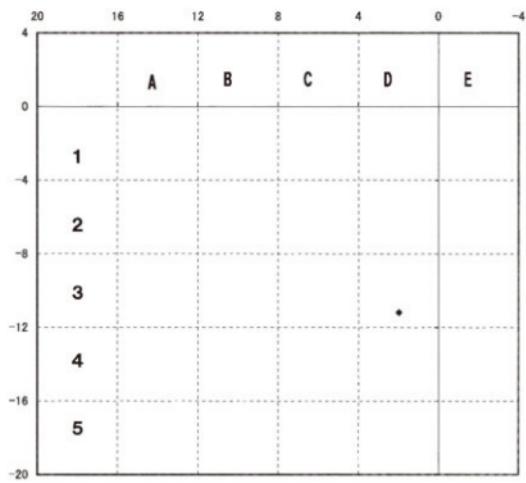
第28図 ヤコウガイ・フタ・貝その他出土分布図

炭化物出土分布図



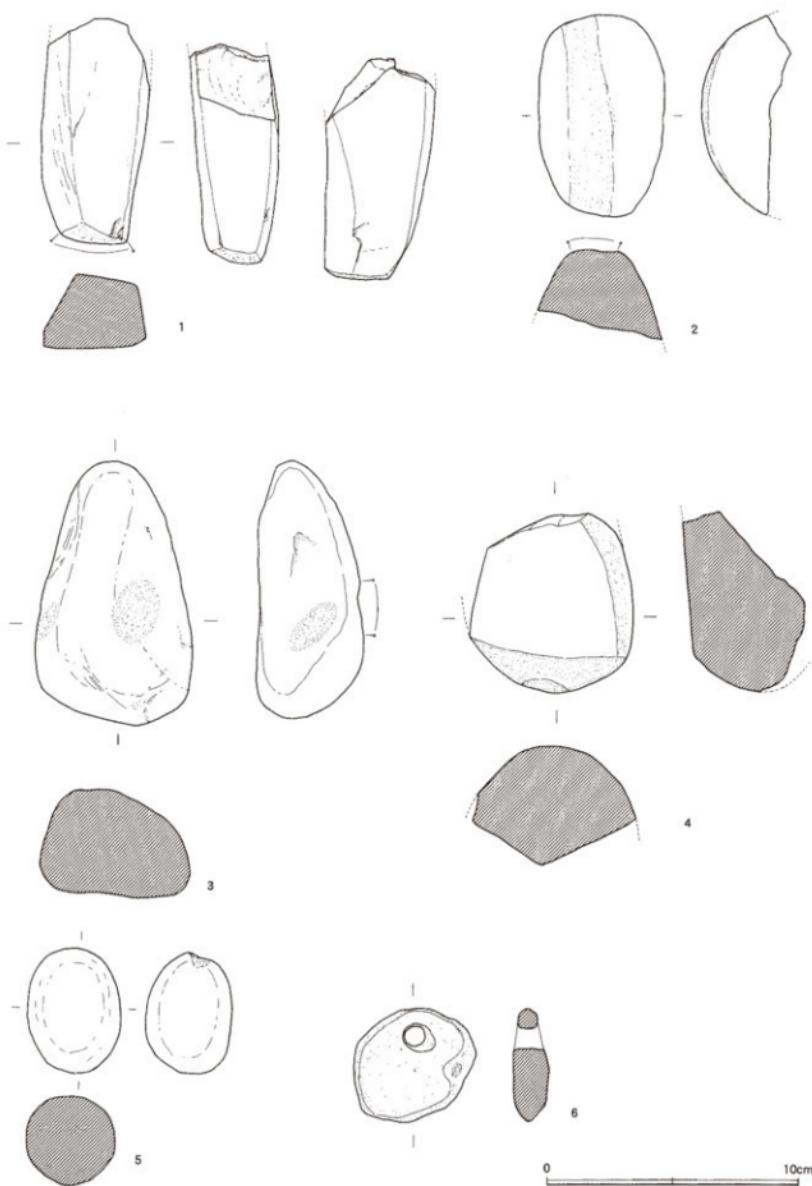
総個数 25

鉄器出土分布図

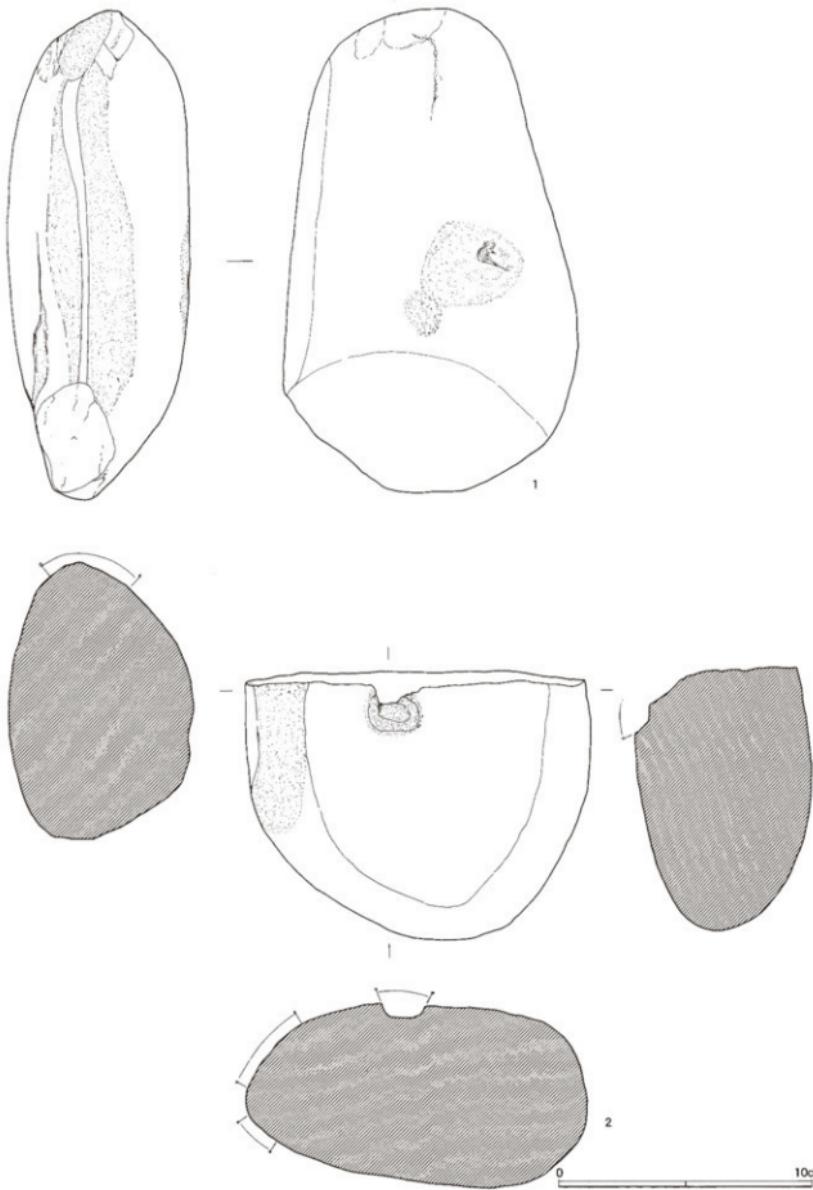


釣り針 1

第29図 炭化物・鉄器出土分布図



第30図 石器実測図(1)

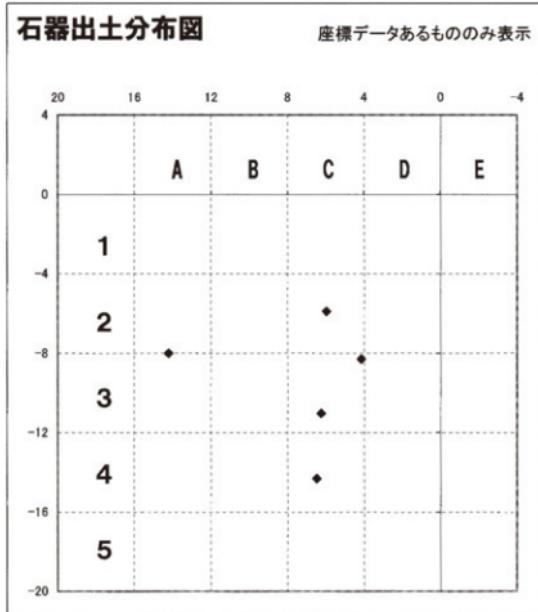


第31図 石器実測図(2)

区	区分	種別	地点No.	層序	出土年月日	X	Y	Z	備考
A-2		たたき石	10848		2003.5.2	10	14.217	-8.002	-1.556 石器 ○
A-3	IV	磨石		包上	2003.5.5	14			○
A-3	I	磨石			2003.5.6	18			○
B-1		石ダン		包含	2003.4.28				○
B-1		凹石		包含	2003.4.28				○
B-1		磨石		包含	2003.4.28				○
C-1	I	クガニ石		包含	2003.5.10	27			○
C-2		砥石	11368				5.958	-5.9	-1.33 石器 ○
C-2		磨石		黒	2003.5.3	13			○
C-3		磨石	11466		2003.5.6		6.241	-11.033	-0.954 石器 ○
C-3		磨石		包上	2003.5.5	15			○
C-4		凹石	12096		2003.5.9		6.469	-14.314	-0.925 石器 ○
D-3	I	磨石		包含	2003.5.10	25			○
D-3		有孔石器	12116		2003.5.9		4.138	-8.3	-1.059 石製品 ○
D-4	III	打ち石		包含	2003.5.8	23			○
D-4	III	打ち石		包含	2003.5.8	23			○
		クガニ石		包上	2003.4.26	3			○

石器個数 17

第3表 石器出土表



第32図 石器出土分布図